

---

# P 3 P + 番長

ごぶりん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

P3P + 番長

### 【Nコード】

N8553X

### 【作者名】

ごぶりん

### 【あらすじ】

ペルソナ4の主人公がペルソナ3の月光館学園（中等科）に通っていたらという設定です。3の主人公はP3Pの女主人公です。基本原作どおりに進みます。

オリジナル設定もありますのでオリジナルとが嫌いという方はご注意ください。

## 二人の主人公紹介（前書き）

筆者のP3PのクリアとP4のアニメ化が重なったので衝動的に書いてしまいました。

## 二人の主人公紹介

### 二人の主人公設定

なるかみ ゆう  
鳴上 悠

ペルソナ4の主人公の2年前、中学3年生で月光館学園中等科に通っている。

ペルソナの素質がありアルカナは愚者、ペルソナ3の主人公と同じでワイルドの力を持っているはずだが現状ではベルベツトルームに入ることができないため一つのペルソナしか持っていない。

ペルソナ4での所持ペルソナはイザナギだが初期ではその力に目覚めていない。

所持ペルソナはセイメイ（阿部清明）

ありさと そら  
有里 宙

P3Pで追加された女性主人公。特別課外活動部の中心人物。ワイルドの力を持ち複数のペルソナを操る。

物語開始当初は魔術師、恋愛、法王、戦車、皇帝、隠者のコミュニティ活動をしている。

ゲームと違って愚者のコミュニティは鳴上を相手に結ぶ。

## 二人の主人公紹介（後書き）

P3の主人公は姓はマンガ版、名前はオリジナルです。

P4の主人公の名前はアニメからです。

番長のペルソナがイザナギではないことに関しては一応理由があります。

5月9日

SIDE 鳴上 悠

月光館学園中等科3年に在籍する俺、鳴上悠は困っていた。

「……………」  
GWも終わり世間では無気力症：俺の予想ではただの5月病が広まっているが世間のやる気のなさとは無関係に時は進んで行き中間試験まで10日を切った。少しは勉強を進めなくてはいけないのだが…

「俺も無気力症か、まったく勉強が進まない」

普通にGW明けのテンションで勉強が進まないだけなんだが…いくら月光館学園が初等科から高等科までありエスケーター式で進学ができるとはいえそれなりの点数は取っておきたい。

試験は18日(月)からで今日は9日(土)：もうすぐ日付が変わって10日(日)約一週間ほどだ。

いや、まだ一週間あるとも考えられる。

「…気分転換にコンビニでも行くか」

本来なら深夜といっても良い時間帯に中学生が出歩くべきではないのだろう。だが幸い…といって良いのかわからないが俺の両親は今是不在。同じ会社に勤めていて現在出張中だ。

割りに出張なども多く海外に行くことも多いと聞いている。

そついうわけで俺の外出をとがめる大人は今はいない…まあ警察に捕まって補導とかされるのも困るのでコンビニで明日の朝食と飲み物とか買って帰ってこようと思う。

「今日は満月か…」

外に出てふと空を見上げると大きな月が真円を描いている。

普段月など意識をしていないのでたまに見上げて偶然満月だとなんか得した気分になるな。

「…!？」

街灯が消えた？一つくらいなら驚くことではないかもしれない…が周りの電気すべてが消えている。

停電か？

月明かりのおかげで不自由というわけではないが…

「停電のときってコンビニのレジって動かないよな？買い物出来るのか」

ちよつと不気味な雰囲気を感じながらもコンビニまではもうすぐだし…一度外に出たのにこのまま帰るのは嫌なのでそのままコンビニに向かうことにした。

ゴン！

「痛！」

考えてみれば当たり前のことだが電気が動いてない。自動ドアは開かないということでもある。

うわ…恥ずかしいな…自動ドアに頭ぶつけるとか…どんなドジだよ、俺。恥ずかしくなって思わず辺りを見渡してしまう…知り合いとかいたら最悪だ…

「…………え…………？」

なんだ…これは…

結論から言うと俺の失敗を見ている人はいなかった。それどころか

周りに人間はいない。店の中にもだ。  
そう24時間営業しているはずのコンビニの中にも人はいない…そこにはいくつかの棺桶が並んでいた。  
「なんだ…これ…どうなってるんだ…」  
しかもなんだか息苦しいような…圧迫感のようなものも感じる気がする…状況が理解できない…俺は事態が理解できずにそのまま呆然と…しばらくの間立ち尽くしていた。

SIDE 有里 宙

「ペルソナ！」

私は自分のペルソナ、オルフェウスを呼び出して目の前の大型シャドウに火炎属性の魔法アギをぶつける。

『敵は消耗している。あと一歩だ』

通信機から敵の様子を探っている美鶴先輩の声が聞こえる。

「とは言っても時間は大丈夫なんすか？」

順平はかなり焦ってるみたいね…無理もないよね。本来は機械も止まるはずの影時間…しかし今私たちの乗っている電車のみは動いている…大型シャドウに乗っ取られているからだ。

聡い人ならこの状況がとてつもなく危険ということがわかるだろう。あえてもう一度言おう。他の電車が止まっている中一つだけ動いている…このまま進んでいたらあと2、3分以内に何とかしないと前の車両と衝突する。

焦る気持ちは私も一緒なのだが…



「大丈夫だつて！まだ余裕あるしもう一息で倒せるんだからね」

この実行部隊のリーダーは私ということになっている。リーダーがここで取り乱したらそれこそ危険だと思う。先輩たちに一方的に決められた役割とはいえなつたからにはしっかりしないかね。

「そうよ、順平。男のあんたが一番最初に弱音吐いてどうするのよ」  
彼女の場合は怯えていてもそれを知られたくないタイプだ。内心は結構ビビってるよね…っとしっかり役割も果たさないと

「ゆかり、こうなつたら回復はもう良いから全力で攻勢に出るよ」

「わかつたわ。イオ！」

ゆかりのペルソナ、イオが疾風属性の魔法ガルを放つ。彼女の場合魔力が高いから魔法攻撃が一番の攻撃手段だ。私のオルフェウスより魔力高いんだよね。まあ私の場合ペルソナを付け替えることができるからもしかしたら彼女より高い魔力を持つペルソナもいるかもしれないけど…

「弱音じゃねえよ！俺はきちんと状況を把握しようとしてるだけだつて」

「はいはい、わかつたからしつかり攻撃しなさいよ」

この二人の場合順平の発言にゆかりが突っ込むというのが定番とかしている気がする。

言い合つても仲良いなと感じる。

「いけ、ヘルメス！」

順平のペルソナ、ヘルメスが手に持つ剣で切りつける。順平の場合は魔力が低く力が高い傾向にあるためこうして肉弾系の攻撃をするのが一番効率が良い。

…あれ？たしか順平のペルソナって鼻の長いおじさんが言うには分類上『魔術師』のアルカナを示すって言つてたよね？魔術師なのに魔法より肉弾得意なんだ…私の宿す魔術師のアルカナを示すペルソナのネコマタもそこまで魔法寄りってわけではないけどね。

まあ、私たちが攻撃を仕掛ける間シャドウも黙ってやられていくれるわけではなく…こちらに氷結攻撃を仕掛けてくる。私たちが一

体に対してしか攻撃しかけられないのに敵は私たち全員にまとめて攻撃してくるのはずるいよね。

広範囲の氷結魔法を私はなんとか避けるが順平とゆかりはともに攻撃を受けてしまっている。ここで決めないと…

私はペルソナではなく手に持った薙刀で間合いをつめて切りかかる。

「やあ！」

一撃じゃ足りない…

「はーせい！」

二撃、三撃…渾身の力をこめて薙刀を振るうと敵も弱ってきていることもあつてよろける…でもまだ倒れない…?!でも隙はできた

「ゆかり、順平、まだ動ける?全員でこの隙に全員でしかけるよ!」

「そう言いつつ私達がまだ戦えること確信してるんでしょ。」

「おう!俺っちにまかせておけ、行くぞ」

全員で一斉に体勢を崩したシャドウに攻撃を仕掛ける、ペルソナを呼ぶ暇も惜しいとばかりにゆかりは弓で、順平は両手で持っている大型の剣で…

『敵シャドウ消滅、よくやったな』

美鶴先輩の声で私たちも攻撃の手を止める…間に合ったみたい…よかった

「ギリギリ…セーフか」

順平も少し安心したかな…あれ?!

「…ってオイ!止まんねえじゃねえか!」

…そくだよねえ、まだ動いてるよね

「そつか、ブレーキかかないと、すぐには…!」

あー言われてみればそのとおり、世の中には慣性つてもんが…

『おい、どうした!?前の列車はすぐそこだぞ!』

通信機からも美鶴先輩の焦った声が…つてのんびりしてる場合じゃないよ!

「うがー!こんなモンの運転なんてわかつかよ!」

「私に任せて!」

こう見えても電車でG をむかしゲーセンでやったことがあるんだ。  
「キヤアアア」

ゆかりの悲鳴をバックに運転席に飛び込みブレーキを引く

「と…止まった？」

「止まってる…みたい。」

ゆかりと順平の安堵の声が後ろから聞こえる。

『おい、怪我はないか!？』

「い、一応大丈夫です」

美鶴先輩の質問にゆかりが対応してくれてるみたいだ…

「や、やば、あたしヒザ笑ってる…」

「あーっ、あーもうっ、メチャメチャ、やな汗かいたっつーの…おい、ヘーキか、宙ツチ？」

二人とも気が抜けて精神的に結構着てるみたいだね

「私は全然いけるよ」

「マジ? たく、このオテンバちゃんは…」

失礼ね。そう言いつつも結構私も怖かったのに…ブレーキの情報ソースは数年前にやったゲーセンだし…

『フウ…無事らしいな。今回はバックアップが至らなかった。済まない…私の力不足だ。』

美鶴先輩は責任感強いなあ…こんなこと予測できなくても仕方ないと私は思うけどね。

『シャドウの反応はもうない、よくやってくれた、安心して戻ってくれ』

これで作戦終了みたい。影時間の戦闘は疲れるのよね…お腹減ったなあ

「てか、ブレーキ、よくわかったね？」

…ゲーセンでやったからってちょっと言いづらいかも…

「お、女の勘かな…」

「女の勘ってそんなトコに働かないでしょ…」

呆れた用に言われたけど…なんとか誤魔化せたかな…？

「ああ…いや、もう、何でも。」

うん、気にしないでいてくれたら私も嬉しい。

「つか、帰り、なんか食ってかねえ？安心したらハラ減ったよ」

順平ナイス提案

「あのねー、女の子はこんな時間に食べないって…ねえ、宙」

…ごめんなさい、食べようとしてました。

「そ、そうそう、でも影時間って体力使うから、気持ちはわかるよ」

「そうね、コンビニくらいなら寄ってもいいかも」

「…ってかよく考えたら影時間終わるまで待つてなくちゃコンビニ寄つても意味なくね？」

あれから私たちは影時間の中3人でコンビニに向かっている。桐条先輩も誘ったけど来なかった。

「良いじゃん、どうせもうすぐ影時間も終わるし、少し待つだけだつて…ってあれ？」

「どうしたんだ？ゆかりツチ」

「あれ、コンビニの前に人が立つてない？」

確かにゆかりの言うとおり。コンビニの前に呆然と立っている少年がいる。

「へ？別に不思議じゃないだろ？コンビニの前に人がいたって…」

……え！？」

順平もようやくこの状況に気付いたみたいだ…今は影時間普通の人間は『象徴化』という現象にあい棺桶の中で眠っているはずだ。

「ゆかり、桐条先輩に連絡とって、私はあの子のところに行ってみる。順平も付いてきて」

「うん、わかった」

「お、おう」

SIDE 鳴上 悠

「ねえ、君、大丈夫？」

どのくらいの時間そこで呆然としていただろう…気が付くと目の前にポニーテールをした俺より少し年上…高校生くらいだろう、かなりの美少女とついでに帽子を被った男の人に話しかけられた。

「あ…す、すいません、大丈夫です。それよりなんかおかしくないですか？」

答えつつ辺りを見渡すと状況はまったく変わってない。相変わらず棺桶は見えるし電気も一切ついていない。

「大丈夫、もうすぐ影時間も終わるし」

「影時間…？」

聞きなれない単語が出てきている。この人はこの怪現象のことを何か知っているんだろうか…俺が疑問に思いたずねようとしたところ不意に周りに明かりが付いていく。それに棺桶があったところに何事もなかったかのように人が立っている。

「え……なにが起こっているんですか？」

「えーと…詳しい説明をしてあげたいけど…ちょっと待ってね、とりあえず先に買い物済ませちゃわない？君も何か買い物に来たんでしょう？」

SIDE 有里 宙

「で、ゆかり、桐条先輩はなんて？」

私達は合流したゆかりも含めて少年が会計中に軽く相談する。

「うん、詳しい説明は後日に回したほうがいいって…『素質』がある可能性があるから連絡先とかは聞きだしておく用に言われたけど」  
「あーそうだな、時間も時間だし…初めての影時間でまだ混乱してるだろうし」

そう言えばペルソナ使いでも影時間に慣れないうちは記憶の混乱と起こりやすいんだっけ…自分が平気だったからすっかり忘れてた。  
「でもさ。この怪しい状況で連絡先聞いてさようならって私たちのほうが怪しい人じゃない？」

「大丈夫だって、宙ならできるわよ。宙ってなんか話しやすい雰囲気とかあるし」

「あーなんとなくわかる気がする。宙ツチってなーんか話しやすいんだよな」

二人とも無責任なことを言う…確かに割り與人見知りしないタイプだけどさ…確かに順平の軽いノリやゆかりのデフォルトのツン状態と比べたら私のほうが上手くできそうなんだよね…仕方ないなあ…

SIDE 鳴上 悠

明日の朝食とか気分転換用の飲み物とかそんな気分じゃなかったけど少女に押されるようにして買い物を終えた。そして向こうはもう一人美少女が追加されていた。

ああ、そう言えばこんな非常事態で名乗ってなかった。

「えっと鳴上悠です。」

「私は有里宙、宙で良いよ、私も悠くんって呼ぶね」

「はい、それでいつたいあれはなんだったんですか？」

「きちんと説明してあげても良いけど…悠君大丈夫なの？普通に部屋着でちよつと外に出て買い物に来たって格好だけど」

「めんどくさくて近くのコンビニに行くときの服装にこだわらないのは俺だけじゃないはずだ。」

「だからさ、日を改めて詳しいことを説明するってことじゃダメかな？」

美少女が上目使いで言うのは反則だと俺的には思う。

まあ見た感じ悪い人には見えない。状況的に見て怪しい気もするがこのまま放置するって言うのも気味が悪い…結局その日俺は宙さんと連絡先を交換して家に帰ることにした。

…これが俺の人生を大きく変えることにそのときは気付いていなかった……

## 5月9日（後書き）

おまけ

5月某日

噴水に大量の500円玉を滝のように入れている女性がいる。

・声を掛ける

・そっとしておこっ

・そっとしておこっ

予定と違って悠君の出番が少なかったです。

メインになるのは次回からってことで…会話が原作とほとんど変えずに展開していったP3サイドが思ったより長引いてしまいました。駄文ですが読んでくださった方ありがとうございました。感想をいただける大変嬉しいです。



5月10日

SIDE 有里 宙

昨日の夜作戦後に予期せず事態に遭遇したせいでそのままミーティングに突入した。

正直…今日が日曜日でよかったと思う。ただでさえ影時間で活動した次の日は疲労しているのにその後にミーティングで寝不足は辛いものがある。

昨日決まったこととしては説明は幾月さんがするってこと。そして昨日の顔合わせた私も同席しないといけないってこと。

今日は古本屋に遊びに行こうと思ってたのになあ…今日は外出控え  
たほうがよさそうだし…

とりあえず彼に連絡しないといけない。

SIDE 鳴上 悠

朝、昨日のは夢だったんじゃないかという希望的観測を持ちつつ目を覚ました俺だったがこれが現実と言うことをすぐに思い知らされることになる。

携帯をみれば交換したアドレスが登録されていたのですぐに気付け  
たのだからが無意識のうちに避けていたのかも知れない。

もちろん向こうから電話が掛かってくれば避けようがない現実と言うことがわかるわけだけど…

昼過ぎに昨日の女性、宙さんから電話が掛かってきた。今日の夕方に時間があれば会って話したいと言うことだった。驚いたのが向こうが指摘してきた場所が巖戸台分寮…月高の寮と言うことだ。

怖くはあった。昨日のは明らかに異常事態だったし…でも知らないままにいることも怖いし…

本来なら昼間は勉強して過ごすべきだったんだろうけど…この状態で勉強しても手に付かないだろうと思ったのでこの前リニョールをした古本屋に寄って少し時間を潰し巖戸台分寮に向かうことにした。

寮に入ると結構意外に思った。入ってすぐに学生寮とは思えないようなラウンジがある。

そこに昨日会った宙さんと昨日はいなかった美人という言葉が似合う女性、そしておっさんの3人が待っていた。

「やあ、待っていたよ、僕は幾月修治、一応君も通っている月光館学園の理事長をしている者だよ」

「私は桐条美鶴、よろしく頼む」

…は？理事長？それに桐条ってまさかあの桐条なのか？…って呆けている場合じゃない、俺も挨拶しないと…

「鳴上悠です。あの…昨日の妙な現象を教えてくれると聞いてきたんですけど…」

「うん、その話なんだけどね、実は一日が24時間じゃないって言われると君は信じるかい？」

何を言ってるんだ、このおっさん…実は理事長って言つのも妄想とか？

「信じられなくて当然だと思うが君はもうそれを体験しているんだ」  
…それが昨夜のことってことか

「なかなか頭の回転がいいようだな。そうだ、君が昨日体験した  
と、あれが普通とは違う時間だ。」

あれは影時間一日と一日の狭間にある隠された時間だ」

桐条さんが説明を引き継ぐように話し出す…たしかに、昨日家に帰  
って時計を見て驚いた。かなりの長時間呆けていたはずなのに時間  
はぜんぜん過ぎていなかったし…

「つまり俺は普通の人が体験できない時間を過ごしていたってこと  
ですか？」

「うわ、理解力あるね、君。私初めて聞いたときはまったく理解で  
きなかったよ」

「影時間は每晚必ずやってくる。今夜もこの先もずっと。ただし普  
通の人は認識できない棺桶に入って眠っているからだ。」

「それで何で俺がその時間に動けるのでしょうか？」

「その件についてはひとまず置いておくとして影時間の説明を続け  
させてもらおう。君は幸運にも昨日は会わなかったようだが影時間  
の間には化け物が出る。私達はそれをシャドウと呼んでいる」

…化け物って…なんか話がやばい方向に

「シャドウは影時間にのみ現れてそこにいる生身のものを襲う、シ  
ヤドウに襲われたものは気力を失い…君も知っているだろう。世間  
で無気力症と呼ばれるものたち、あれがシャドウに襲われた人たちだ  
。」

重度の5月病だと思っていました…

「ってそれはつまり俺が襲われる可能性があるって事ですか!？」

「そう、車道に出たら危ないようにシャドウは危ないんだよ」

………時が止まった

「…だから放置していたら危険なので私たちがシャドウと戦ってい

るわけだ」

あ、桐条さんなかったことにした。

「え？危険なんですよ。」

俺も寒い空気でいられるのは嫌なのでそれに乗っかることにした。

「影時間の中で自然に適応できる人間は『ペルソナ』と言われる力を使える可能性がある」

「つまり俺にもそのペルソナ……ですか、それが使える可能性があるってことですか？」

「そういうことだ。シャドウはペルソナ使いしか倒せない。だから私達が戦っているんだ」

俺と桐条さんが話を進める中さっきの寒い大人が少し寂しそうな顔をしているが放置……

「そして君がもし、ペルソナを使えるのなら我々に力を貸して欲しい。」

「え！？桐条先輩、彼はまだ中学生ですよ」

……なんで知ってるんだろう……って理事長と『桐条』がいれば俺の素性を調べることなんて簡単か

「私達が活動を始めたのは中学のころだ。彼にその意思があるなら問題ないだろう。」

シャドウにペルソナか……

このことが真実ならたしかに非常事態だと思う……だけど『戦い』俺にそんなことができるのか……

「少し……考えさせてもらえませんか？」

「そうだね、まだペルソナを使う適正があるかはわからないし、それにもうすぐ中間試験だ。テスト前にバタバタして結果が散々でしただってことになったら本末転倒だしね」

あ……寒い大人が復活した……一応こんなでも理事長なんだな。テストのことを気遣うとは

「ああ、学生の自分は勉強だ。とりあえず結論は急がずに君はテストに集中すると良い」

そういえばこの人があの『桐条』さんだったら噂によると生徒会長やってるんだよな…

「えーと今更な質問ですが桐条先輩って言ったら高等科の生徒会長をしていらっしやる方ですね？」

「ほう、中等科の子も知っているのか」

それはそうだろう…多国籍企業である桐条グループを知らない人はこの町にはいない。俺のような学生たちが普段遊ぶ『ポロニアンモール』という名前、ポロニアンは桐という意味で桐条から貰っているくらいだし…

「では中間試験終了までに考えておいてくれ。そのときにまた話そう」

そう俺は声をかけられその場は解散となった。

…影時間、ペルソナ、シャドウ色々な情報を頭の中で整理しつつ俺は家へと向かっていた。

「ちよつと待つて、鳴上君」

さつきはほとんど発言をしていなかった宙さんが声を掛けてくる。

「どうしました？」

「さつきの美鶴先輩の言ってたことだけだね。無理だと思ったら断つていいからね。えーと…君の事色々調べたみたいで私も君のことに事前に教えてもらったけど…君の御両親、桐条グループに勤めてるんでしょ？」

まあ、調べたのなら当然その情報はあるよな…

「美鶴先輩は断ったからってそれを理由に何かするようない人じゃないから。というよりそれを理由に何かするようなら私が黙ってないからね」

たしかにそれも断りづらい理由ではあったが…わざわざ追いかけて

きて言ってくれるなんて親切だな…

「宙さんはなんで戦ってるんですか？」

そこが気になった…宙さんだけではない。昨日会ったほかの二人、名前は知らないけどあの二人も彼女も俺のように一般人のように見える。普通の学生が戦うのは怖くないのか…？

SIDE 有里 宙

「宙さんはなんで戦ってるんですか？」

私は美鶴さんや理事長がこれから強引に話進めるんじゃないかと思っ  
て一応心配して追いかけてきてみたら逆にそう問われた。

「なんで戦うか…か」

私の場合は選択の余地なかったからなあ…最初の実戦は巻き込まれた  
ようなもんだし…そこでいきなり大型のシャドウ吹き飛ばしちや  
つたみたいで先輩たちの勧誘の熱心さは彼の比じゃなかったし…ま  
あ、それでも決めた最大の理由は

「知ってて放置できなかったからかな。」

「え？」

「私の場合ね。今年の4月転入してきて、寮に入っ  
てすぐに戦いに巻き込まれて…シャドウのことも知って…その戦いに私の友達も関  
わっていると知った。」

「友達…ですか？」

「そう、君も昨日会った子、岳羽ゆかり、そのとき一緒にいたんだ  
けどシャドウとかのことは知ってて彼女も戦いに参加しようとはし  
てただけ…」

おそらく…って言うより間違いなく最初からゆかり本人はともかく先輩たちには私にペルソナの素質があるのを知ってて接触させたんだろうけど

「ペルソナの召喚方法ってのは特殊でね…銃で自分の頭を撃たないといけないんだ。それができなくてそれでも必死にやろうとして…」銃を落とされて私に逃げるように声を掛けてたっけな…

「私が転入してきて最初の友達のゆかりがそこまで必死に戦う理由があるなら私も居力してもいいかなーっての言うのがきっかけ」

あつて3日程度の…ペルソナを使って一週間ほど倒れていた私に付いてくれたわけだし

「そう決断した。自分で決断したことには責任を持つ。」

そう『契約』したし

「それに誰かがやらなくてはいけないことをなんだし、私は人任せにするのは嫌いなんだ。」

順平みたいにヒーローになりたいとかではない。ゆかりみたいに何か目的があるわけでもない。

それでも私はこの決断でよかったと思う。この町に来てたった一ヶ月ほどでだけでも自分の周りに多くの人がいて『コミュニティ』を築き始めているから

「だからと言って無理をする必要はないよ、君自身のことは君が決めることだからね。」

SIDE 鳴上 悠

「だからと言って無理をする必要はないよ、君自身のことは君が決めることだからね。」

彼女の瞳には強い意思が見えた。

「参考になりました。ありがとうございます。」

その場は礼を言って辞することにした。

期限はまだある。だが俺の中ではもうすでに結論は出ていたのかもしれない。

年上と言っても俺の一つか二つ上だろう、そのくらいの年の少女が戦っているのに男の俺が逃げるわけにはいけないという見栄なのかもしれない。理由は俺自身にもはつきりわからないが俺は自分に戦う力があるなら…そう考えていた。

## SIDE 有里 宙

「それで、話ってどうなったの？」

夜、2Fの談話スペースで私たち2年生組、私とゆかりと順平の3人が集まって今日の話を話していた。1Fでは真田先輩と美鶴先輩が同じ話題をしてるだろう。同じ話題なら一緒に離せば良いと思うが…ゆかりはどうも美鶴先輩が苦手みたいだからなあ…

「説明と…勧誘かな」

私は今日あった事の内容を二人に伝える。

「おっ、良いじゃん、後輩ができるってことだろ」

順平は単純に乗り気、意外と面倒見の良いところあるからなあ。年下の後輩ができるのが嬉しいのかもしれない。



「普通の中学生を巻き込んで良いのかなあと思うけど…桐条先輩強引なところあるし…」

ゆかりは私と同じこと心配してるみたい、私が勧誘されているときも彼女だけは無理に引き入れようとしなかったし…

「それは大丈夫だと思うよ。しっかりと話しておいたし。それに中学3年ならそこまで子供じゃないでしょ、自分でしっかり決断すると思うよ」

「そうね、昨日見たところ順平よりしっかりしてそうだし」

「ちよっ、そこでなんで俺を出すんだよ」

「とりあえず結論が出るのは中間テスト終了後、順平はいきなり後輩に無様な姿見せないように勉強する必要あるんじゃない？」

「宙ツチまできつい突っ込みを！？あーあ、テストってなんであるんだろうな。昨日大型のシャドウと戦ったのに気が休まらないってどういうことだよ」

そう、結論が出るのは先のこと…私達に新たな戦力が加わるのかどうか…

5月10日（後書き）

今回は説明回です。

初回と二日連続で投稿できましたがここからは少し更新頻度も遅くなります。

あと重要イベントがない日の話はもっと短くしたいですね。だらだらと長すぎるような気がしますし。

それでは読んでいただいてありがとうございます。観想いただけるとうれしいです。

5月23日～24日（前書き）

テスト期間終了まで時間飛びます

5月23日～24日

SIDE 鳴上 悠

中間テストも無事終了した。

俺はすでに参加も決意していたおかげでテスト勉強に集中することもできた。結果は期待できるだろう。

テストが終了し約束通り俺の結論を話すために理事長と会うことになった。

そして俺は参加することを理事長に話した。そこからの展開が早かった…

シャドウとの戦いのための特別課外活動部、そこに入ると寮暮らしをすることになるらしい。

とは言っても実家がすぐ近くにある俺は寮に入る理由はない。しかも入る場所は高等科の寮である。中等科の俺が入るのは不自然すぎるだろう。

どうするものか…そう心配したのも杞憂であった。理事長はすでに手を回していたらしくその日のうちに俺の両親に会い説得してしまっ

った。

寒いだけの大人かと思っただけで意外と使える。桐条グループにも手を回していたらしく親父達に長期出張の話も出ているらしいし…俺は権力と言うものの恐ろしさをこの年で学んだようだ

(知識が高まった)

なんか音が鳴って音符が飛んだような気がした。  
テスト終了が土曜日、次の日が休日なのが幸いだった。  
土曜のうちに荷物をまとめて日曜日に運ぶことになった。

「おう、来たか、荷物運ぶの手伝おう。」

そこで初めて顔を合わせた男の人とこの前もあつた帽子の人が荷物を運ぶのを申し出てくれる。

「ありがとうございます。今日からこの寮に入る鳴上悠です。」

「ああ、俺は真田明彦だ、よろしくな。」

つて真田明彦！？あのボクシング部の！？俺でも知っている名前だ。  
無敗のボクシング部のヒーローだ。中等科まで噂が響いてくる。

「俺は伊織順平、順平でいいぜ。」

「真田さんに順平さんですか、よろしくお願いします。」

宙さんに岳羽さん、桐条さん、真田さんとやたらともてそうなの中に順平さんがいるとほっとする気もした。

「お前何か失礼なこと考えてねえ？」

「そんなことないですよ。」

「話してないでさっさと運んでしまおう。」

実家が近いこともあり大した荷物量ではない。男3人でやるとわりとあっさり終わった。

荷物を運び終えた後この寮にすんでいる女性陣も帰った来た。

昨日のうちに俺の加入は伝えられていたらしい。

「私は岳羽ゆかり、宙から話は聞いている？よろしくね」

「改めて名乗ろう。桐条美鶴だ。特別課外活動部の部長だ」

そうやって自己紹介している間に一番遅くまで外出していた宙さんも帰ってきた。

「ただいまー」

「おかえり、宙、今日は鳴上君も来る早めに帰る用に言われてたでしょ」

「いやー、ごめんごめん、映画館でバイトが終わった後こっそり上映中の見てたら止まらなくなっただけ」

それは良いんだろうか…

「というわけで改めてよろしくね、鳴上君」

3年で部長の桐条美鶴さん、同じく3年真田明彦さん、2年で作戦時のリーダーの有里宙さん、同じく2年岳羽ゆかりさん。2年伊織順平さん、そして俺、中等科3年の鳴上悠。これが現在の特別課外活動部通称SEES (Special Extracurricular Executive Sector) のメンバーらしい。あ…ついでにいうと顧問は寒い大人こと理事長の幾月さんだ。

「それでどうする？新メンバーが入ったしさっそく今夜タルタロスに行くか？」

タルタロス？真田さんの言葉に俺は疑問符を浮かべる。

「お？見たことないのか？見たらびびるぜ。」

「確かに順平は始めてみたときすごく取り乱していたし。」

「タルタロスとはシャドウの素だ。そこに影時間とシャドウの謎が隠されていると思われる。なので我々が探索を進めている。」

順平さんとゆかりさんでは説明が進まないと思ったのか桐条さんが教えてくれる。

「で、どうする？リーダー」

探索のことも宙さん任せなのか、リーダーとして信頼されてるんだな。

「うーん…タルタロスには向かいましょう。でもその前に準備は必

要だと思えます。鳴上君、ちょっと付いてきてくれる?」

「準備つてなんです?」

「いいからいいから…」

宙さんに連れられ夜のポロニアンモールに連れて来られた。

「ここで買物ですか?」

確かにシャドウとやらと戦うなら青髭の薬とかはあったほうが良い。

「うん、そう、武器買わないとね」

は…?ゲームじゃあるまいし武器屋なんてこの町にはないと思うのだが…疑問に思う俺を連れて行ったのはなんと警察だった。

「おう、よく来たな、新しいものも仕入れたぞ」

本当に武器や防具が売っていた…

話を聞くとこの警察官、黒沢さんはこの町の異変を感じ取っているらしくそれを解決する力を持つ俺たちに力を貸してくれているらしい。

「お金は取るんですよ?」

「この世に無料のものなんてない」

…無料より高いものはないって言うしな

「それで、鳴上君はどんな武器が良い?」

片手で使える剣、両手で使える剣、グローブ、薙刀、弓、斧、槍、突剣様々な武器が並んでいる。

俺は両手で使える剣タイプを選ぶことにした。このスタイルが俺に一番合う、順平さんも武器を使うらしいが。

あとは防具のほうも揃えて俺たちは寮に戻ることにした。

宙さんは少しゲーセンに寄りたそうにしていたが今日はタルタロスに行くからと自重したようだ。

そして深夜12時…その時間前俺達は月光館学園高等科の前にいた。



5月23日、24日（後書き）

おまけ

「私は岳羽ゆかり、よろしくね」

・「よろしくお願いします」

・「よろしく、ゆかりッチ！」

「よろしく、ゆかりッチ！」

その発言をするには勇気が足りない

次回タルタロスです。

鳴上の武器はキタローポジションの小剣にしようかとも思ったんですが4の原作どおり両手剣です。

ゆかりは原作やっていると男主人公や順平には結構きついけど年下にはわりと優しい印象が筆者にはあります。

順平も主人公には嫉妬しますけど鳴上の立場になら優しい先輩になりそうな気がしますし。

皆さんはどう感じられるでしょうね？

では読んでくださってありがとうございます。

感想をいただけると励みになります。

5月24日 影時間

SIDE 鳴上 悠

非常識な事態にはここ二週間で慣れていたつもりだったがこれには驚いた。

ありのまま起こったことを話す。

影時間になったとき学校が大きな塔に変化した。  
何を言ってるのかわからないと思う。

俺も一瞬何が起こったのかわからなかった。

超スピードとか超能力じゃない、もっと恐ろしいものの片鱗を味わった…

…とまあお約束のボケはさておき本来学校があつたはずの場所に大きな建築物が現れたと言うことだ。

「驚いたか？これがタルタロスだ。」

「私たちも先月からこの探索を始めたばかりだからまだ何もわかつてはいないけど。あからさまに何かありますって雰囲気でしょう？」

真田さんと宙さんの説明に俺は頷くしかない。

ともあれ俺にとっては初実戦…緊張はする、だがそれとは別に高揚感を感じながら俺はタルタロスに足を踏み入れた。

SIDE 有里 宙

私はいつも通りを装いつつも鳴上君のことが気になっていた。

私は他の人のアルカナがわかる。アルカナとはペルソナの性質を示している。

鳴上君のアルカナは愚者：私と同じワイルドの力を宿していると思われる。

彼なら私以外の人間には見えない扉：ベルベツトルームが見えるのかもしれない。

彼に複数のペルソナを扱う力があればかなり心強い。

この事件に関わってから私にしか姿を見せない謎の少年、私にしか見えないベルベツトルーム。

これらのことは他の人には話していない。相談できる存在になり得るのではないか。そういう期待感がある。

私はベルベツトルームのほうに歩を進めた。

SIDE 鳴上 悠

宙さんが何もない方向に足を進めて足を止めた。

「何をやってるんですか？」

「ああ、気にしないほうが良いわよ。宙はよくああやってあの位置でボーっとしてるの」

俺の問いにゆかりさんが答える。

「でも宙ツチがああの行動取った後って宙ツチのペルソナ強いのになるんだよな。」

「強いことになる？」

順平さんの発言に俺は疑問に思う。ペルソナは一人一体じゃないのか？

「ああ、彼女の場合は別だ。一人で複数のペルソナを使いこなすことができる。状況に応じてペルソナを使い分けどんな状況にも対応できる。私が彼女にリーダーを任せ頼りにする理由の一つだな。」  
桐条さんが俺の疑問に答えてくれる。

こうなったら少しの時間待っているのが普通のことのようだ。順平さんたちは雑談を始めている。

俺は何故か気になってそこで立ち止まる宙さんのほうを見ていた。

「？なんだ俺の気のせいかな、一瞬何か青い…扉か？見えたような気がしたが一瞬のことなのではつきりとは言えない。」

「うん、それじゃあ出発しようか。」

考えているうちに宙さんがこちらにやってきていた。

いよいよ実戦か。俺はこれから始まる戦いに頭を切り替えることにした。

S I D E    有里    宙

見えないか…私はベルベットルームに入って後ろから聞こえる会話を聞きながら考えていた。

「ようこそ、ベルベツトルムへ」

すでに顔なじみになった鼻長おじさんことイゴールさん、私に色々  
と依頼をしてくる美人さんエリザベスさんに迎えられる。

「ほう、これはまた興味深い方がお仲間になったようですね」

「イゴールさん、なにかわかつてるの？」

「本来交わることのない運命が重なり合ったとき、物語はどのような道筋を辿るのか。」

相変わらずわかりづらい言い回しのおっさんである…

「結局どういことなの？ 鳴上君は私と同じような力持っているんだよね？ 何で彼はここには入れないの？」

「彼は本来ならまだ力を目覚める運命ではなかったのでしょうか。いずれここのお客人になりえるかもしれませんが今はまだそのときではありません。」

わけがわからないし…このおっさん色々知ってて事件の黒幕なんじゃないかと思うときすらある。

「ここでは時も空間も意味をなさぬもの。私とて全てを理解しているわけではありません、ただここに訪れる方々に運命に立ち向かうための力添えをするのが使命でございます。」

…まあ、実際にペルソナの合体とか助かるのは事実だし…しかしこの言い回しだと鳴上君、他の事件にも巻き込まれる運命？

………強く生きるんだよ、少年

S I D E 鳴上 悠

気のせいかな宙さんの視線に同情のようなものを感じる…

「それじゃ、今日は鳴上君のデビュー戦だし軽く行こうか」

「おいおい、確かに今日は鳴上のデビューでもあるが俺の復帰戦も兼ねているんだぞ。」

真田さんはあばらをシャドウにやられて戦線を離れていたらしい。

たまたま真田さんの復帰と俺のデビューが重なったらしい。

「鳴上、ちゃんとペルソナ呼べるか？まずは俺ツチが手本見せてやるから同じようにやれよ。」

「順平だつてまだペルソナ呼べるようになって一ヶ月くらいでしょ、あんたの場合先輩ぶりたいだけでしょ。」

今年度に入って課外活動部のペルソナ使いの数はいつきに増えたらしい。

年単位で戦い続けているのは桐条さんと真田さん、そのうち桐条さんは今はバックアップとしてエントランスから指示をする立場（桐条さんのペルソナ能力には後方支援の能力があるらしい）真田さんは怪我から復帰したばかり。それを踏まえても戦闘暦一ヶ月の宙さんが現場リーダーと言うのはすごいと思う。

「ほら、いつまでも話してないで行くよ。」

宙さんに率いられて俺達はシャドウのいる領域に入ってしまった。

タルタロスエレベーターはない。正確に言うならば階層をいつきに移動する装置はあるがそれはこちらで手動でスイッチを入れなければその階層にはいけない。

つまりはこの軽く100階は超えてそんな塔を自力で登らなくてはいけない。

それでも階段を登るだけならまだ良い。毎回構造の変わる迷宮を進んでいかなくてはいけないのだ。

俺が今いるところは16階、第1階の最上階らしい。

前は通れなかったらしいが満月の夜（俺が影時間い気付いた日だ）に大型シャドウを倒してから通れる用になったらしい。

つまり先輩たちにとっても未探索ゾーン…やばいな、どんどん緊張してきた。

階段を登り、少し歩くと目の前にシャドウ…初実戦だ。

「先輩、分析お願いします。」

『了解、少し時間をくれ』

宙さんの指示で桐条さんが敵の能力を分析する、シャドウとの戦いにおいて敵の弱点を知ることが重要らしい。弱点を突いて敵がひるんだところを攻撃が定石という。

もちろん分析中俺たちもボーっとしてるわけにも行かない。戦いが始まった。

相手はマントとフードを付けて空中に浮いている…なるほど、確かに物理法則とか無視した化け物だ…

「ペルソナあ」

順平さんの召喚した『ヘルメス』が敵に突っ込む、岳羽さんの『イオ』が疾風を放つ、真田さんの『ポリデュークス』が電撃を放つ。

それを見ながらも俺は…なかなかペルソナを呼び出せずにいた…銃を自分の頭に向けて引き金を引く、それだけなのに躊躇ってしまう。そしてシャドウが虚ろな双眸で俺を見る…

「ム…ド」

シャドウの口がそう動いたように見えた。

『いかん！呪殺魔法だ！あれを食らったら…』

魔法陣のようなものが出て俺を包み込むように展開する。

「…鳴上（君）！！」

ヤバイ…俺はここで何もできずに死ぬのか…

（我は汝）

な、なんだ…

（汝は我）

展開されていた魔方陣が俺に触れると効力を失ない消滅する。そして……

「ペ」

俺の中から

「ル」

弾けるような感覚と

「ソ」

力を感じる

「ナ」

俺は震える指で…引き金を引く

（我は陰陽を司りし陰陽師…阿部清明なり）

これが…ペルソナ…俺の力か…

俺は心の声に従いペルソナの力を解放する…

「スクカジャ」

「…へ？」

順平さんの声も聞こえるが無視

「宙さん、ペルソナチェンジであいつの弱点を」

俺は今取れる最善の手段を、攻撃手の命中率を上げる

「え、ああ、わかった、美鶴先輩、分析結果は？」

「あ、ああ、光属性だ」

「エンジェル！」

美鶴先輩の分析結果を聞き宙さんがハマの魔法を放つ…光に弱い敵シャドウは一撃で消滅する。

「おいおい、今のはないだろ、ああやって格好付けて召喚するからには攻撃するだろ！。フツー！」

シャドウを殲滅した後に順平さんに先ほどの戦いに関して突っ込ま



れる。

「ああ、えーと、それなんです…」

言い辛い…が戦闘に関することだ、黙っているわけにはいかない。

「俺のペルソナ…攻撃手段持っていないみたいですよ…」

…どうやら俺のペルソナは今のところ回復の術と味方を強化する術を使えるらしい。今後どのように成長していくかは分からないが今のところ味方をサポートすることしかできない。

「補助特化タイプのペルソナか。うん、そういうタイプが一人いると心強いよ。」

宙さんはそうは言ってくれるが…攻撃は自分の持つ剣で何とかしないとイケないって言うのは案外気が重い…

その後しばらくタルタロスを調査して今日のところは帰ることにした。

こうして俺のタルタロスデビューは終わった…

影時間はなんとか召喚はできたものの自分一人では戦いが大変という事実…しかも日曜の夜にすごく疲れた…（なんでも影時間は通常より疲れ易いらしい）。

これから先大変そうだ…

## 5月24日 影時間（後書き）

鳴上のペルソナ、セイメイに関して

相性 光 無効 闇 無効

スキル

ディア メディア パトラ スクカジャ

習得予定 タルカジャ

P3で仲間で存在しないタイプと考えるとまずは万能系、P4の直斗ボジションが頭に浮かびました。

でも筆者的視点で言うとなら効率が悪くて弱点も付けない万能魔法キャラはそれだけでは使いづらいのです、しかも序盤からメギドとありえないし…

ということではこの作中ではP3時代の鳴上君は回復、強化系、万能系と成長させる予定です。

筆者的にはこのキャラは雑魚戦では他のキャラに劣るけどボス戦ではレギュラーになりそうなタイプと思います。

相性は光闇無効の弱点がないというのは高性能ですしね。

話題が変わりますがペルソナ召喚、ゲーム内ではオープンニングでゆかりがすごく躊躇っているのに本編が始まるとあっさり呼ぶし、順平も平然と使いこなすしで違和感感じたんですよね。一度できればあとは普通にできる用になりそうなものですが…

後から追加で仲間になるあの子はテンポ重視でいちいち躊躇わないで戦うでOKなんですけどね。

まあ、男の子は銃はおもちゃとして慣れている面もあるかもしれませんけどね。

ではここまで読んでいただきありがとうございました。  
感想をいただけるとうれしいです。

今回はコミュ編（予定）

## 番外編 愚者？（前書き）

たまに番外編としてコミュニティ編を入れます。

## 番外編 愚者？

SIDE 有里 宙

『コミュニケーション』他者との絆が私のペルソナの力になる。

つまり人と仲良くなればなるほど私のペルソナは強くなるらしい。

…こう書くとまるで私が打算で人と付き合ってるのかと言われそうな気がする…

勿論ペルソナが強くなることは嬉しい。だが人付き合いって言うのはそれだけのものではない。

元々私は他者と仲良くなることが得意だ。

だからと言って特定の友達とずっと一緒にいるってわけではない。

『広く、深く』

…やっぱり客観的に見たらペルソナのためって思われそうだなあ…  
まあ、このことを知っているのはイゴールさんとエリザベスさんだけ、とはいえ自分の中で打算的に自分が見える…

まあ、私には色々な面があるって言うのは『ペルソナ』が証明してるわけか…

そういう理由もあり私は部活に参加しつつも友達付き合いもあり、委員会もあり、生徒会も手伝いつつたまにバイトもするという多忙な生活を送っている。

開いている日もゆかりや順平のような友人に誘われることも多い。  
しかし今日は珍しく何も用事がない日。こういうときは私は町を色々歩き回ることが多い。

ということと今日は商店街を歩き回っていた。

そして見覚えのある人影が見えたので声をかける事にする。

「おい、鳴上くん。」

SIDE 鳴上 悠

学校も終わり放課後、今日は部活もないし他の友人との予定も入ってない。こういう日は趣味に当てるに限る。ということで俺は趣味の釣りをすることにした。

俺が住んでいるポートアイランドは人工島、つまりすぐそこに海があるということだ。

釣具を取ってきて商店街で魚の餌を購入、さて釣りに行こうというところで知り合いに会った。

「おい、鳴上くん。」

「宙さん？どうかしましたか？」

「たまたま鳴上君を見かけてね、その格好は…釣り？」

まあ、俺の格好見ればわかるよな。

「うーん…面白そうだから私も付いて行って良い？」

正直釣りは根気が必要な趣味だ。魚が掛かるまでのんびり待てるような人でなければ退屈するだけ、俺はそのことを告げてみたが、

「一人より二人のほうが退屈しないでしょ？」

と言われて結局二人で釣りに向かうことにした。

私は糸を垂れる鳴上君と二人でのんびりとした時間を過ごしていた。これはせつかくだから交流する良い機会だね。

「鳴上君ってさ。釣りが趣味なの？」

「ええ、まあ正確に言うとな趣味の一つってところですけど。」

「一つって事は他にも？」

「部活も本気で大会に出たいって言うよりは趣味で遊ぶ集まりって感じです。必ず出ないといけないって部ではないですね。」

その辺は私も同じだ。私も所属はするけどそれだけに縛られるのは嫌だしね。

そこではばらく話していると彼が驚くほど多趣味の人間と言うことが分かった。

部活動のバスケット、吹奏楽、その他にも乱読家で本があれば適当に何でも読むらしい（釣り用の暇つぶしらしい『漢』シリーズと言うのを持っていた）。そして今やっている釣り、一時期はプラモ作りにもはまったと言うし、聞けば料理もするらしい（これは趣味と言うより出張の多い家庭のために身についたスキルというが）。

「す、すごいね。」

正直感心した。

我は汝

汝は我

汝 新たなる絆を見出したり

汝 愚者のペルソナを見出したとき

我ら更なる力の祝福を与えん

「俺より宙さんのほうがすごいと思います。ゆかりさん達に色々聞いてますよ。」

色々話して今日は彼のことが少し分かった。

ちなみに彼は釣った魚は海に帰していた。キャッチアンドリリースと言うらしい。

「魚を何かと交換してくれる人がいたりすれば良いんですけどね。」  
冗談交じりにそんな会話をして私たちは寮に帰った。

## 番外編 愚者? (後書き)

ペルソナ4の主人公ってプレイヤーしだいのところがありますが基本完璧超人ですよ。

料理できて成績は学年上位(TOP?) プラモを作れと言われたら本格的に作り釣りをすれば川のヌシを吊り上げる。

楽器を演奏できて運動もこなし人望もある。

学校行きながらもバイトで下手なサラリーマンよりずっと稼ぎますしね。

まあ、そんな感じで番外編でした。

短めの話でたまに今後もやっていこうと思います。

それでは読んでくださってありがとうございます。

感想いただけると嬉しいです。切実に…



6月1日

SIDE 鳴上 悠

俺が特別課外活動部に参加してから一週間経った。

しかしこの寮生…食生活が酷いと思う。

誰一人として自炊はしていない。

まあ自分の分だけだと外食に頼りがちになるのは理解できる。

その中でも桐条さんやゆかりさん、宙さんの女性陣は外食が多いがまだ気を使っているのはわかる。

しかし順平さんと真田さんは酷い。というか酷すぎる…順平さんはカップラーメンばかり、真田さんは牛丼ばかり…タルタロスに通っている俺たちにとってこのような生活で体を壊しては元も子もないと思うのだが…

まあ、俺も新しい環境だし今までは料理していなかったが久しぶりに料理をしようと思って買い物をしていた。

俺は寮に帰り調理をしている。

「あれ？鳴上君なに作ってるの？」

料理をしていると帰ってきたゆかりさんに声を掛けられた。

まあ、匂いもしてるし気付いて当然だろうな。

「カレーですよ、皆さんの分もありますよ。」

俺がカレーを選んだ理由は簡単、カレーなどは一人分だと滅多に作らないから俺が久しぶりに食べたくなったと言うのが一つ、カレー

が嫌いという人は少ないから振舞うのには向いてると言うのが一つ、最後に余っても一日寝かせて明日食べればOK、今日何か理由があつて食べられない人が出て来ても次の日に残すことができる。(食べられないからと言つて恨むような人達ではないが：公平にしておきたい)「しっかしなあ、ゆかりツチ、女として間違つてると思わない？俺がこの寮に入つてきて最初に食べる手料理が最年少の男のつてどういうことだよ？」

「うるさいわね、だつたらあんたは食べないで女の子が作ってくれるの待つてれば良いじゃない。」

「こんな良い匂いがしてるのに食べないとかねーだろ！そもそもゆかりツチ、料理できるのかよ？」

「できてあんなには作らない。」

「はー……桐条先輩が俺達に手料理振舞うとか考えられないし……宙ツチは料理できそうだけど……」

「ああ。宙はねえ……」

言いたいことはわかる。宙さんはいつも帰ってくるのが遅いし、そのうえ帰つてきてもまた出かけたりとか……手料理を振舞う暇がないように思える。

「こうなつたらやっぱり新たな新人に期待だな！」

新人？

「ああ、そうか、鳴上はちょうどその辺の話の時期に入つてきて聞いているのか。新たなペルソナ使いが俺達の学校にいるんだよ。」

「はあ……あんたまだ諦めてなかったの？」

状況が分からないので詳しく聞いてみると

「山岸風花つて子なんだけどね。その子噂によると身体が弱いらしいのよ。だから戦いに加わるのは難しいってことになってるの。」

「俺はまだ諦めてないぜ、俺顔知ってるんだけどけっこう可愛いんだよ。」

二人の言い合いは続いている……口喧嘩なら俺の前でやらないで欲しい……

しかし…新しいペルソナ使いか、実はペルソナ使いつて俺が思ったよりも多い？

わりとレアな存在なんじゃないかなあと思っていたんだが…加入してから一週間で新人の話を聞くとは…

そうしているうちに皆さんも帰ってくる。

「ほう、鳴上、君は料理ができるのか。」

「カレーか、美味そうだな。」

「カレーの匂いつてやたらと食欲を刺激するよね！」

上から桐条さん、真田さん、宙さんの反応だ。

全員しっかりと食べてくれるようだ。反応が楽しみだな。

「ねえ、ゆかり、鳴上君つてさ、エプロンが異常なほどに似合わない？」

「ああ…私も思った、主夫って感じるよね……」

その日…俺の装備品が宙さんが時価ネットたなかで買った多機能エプロンに変わった…

「ところで、これを食べるための作法とかはあるのか？」

…お嬢様つてすごいな…カレー食べたことないとか…

最初から驚きの事態に直面したが家族の食卓に堅苦しい礼儀など必要ない（一緒に生活しているのだから俺にしてみれば家族同様に大事にしたいと思っている）。

しかしそうだな…俺にとってこのような料理を振舞った上での礼儀と考えると…

「そうですね、みんなで食事するんだから楽しく食事をしましょう。みんなで楽しく食卓を囲むことが作った俺としては一番嬉しいです。」

「うわ、なんか鳴上カッコいい事言うな。」

「私は彼はあと1、2年したら女泣かせになると見た。」

「ああ、顔も悪くないし…やたらともてそうだね、彼。」  
2年陣で何かこそ言われている気がする……

「そついやさ、お前ら、学生用のネット版とかみてる？鳴上は知らないかもしれないけど先週E組の子が校門で倒れてんのみつかったつしょ。」

食事の最中順平さんが俺や2年の二人に話しかけてくる

「あれ、怪談に出てくる”オンリヨウ”の仕業じゃねーかってサ。」

「ああ、俺部屋にネット繋げてないんで、携帯もパケホじゃないからネットとかあまりやらないんですね。」

そもそも俺はその掲示板の存在すら知らなかった。

「オンリヨウとか、マジやめてよ…ウソくさい！」

ゆかりさんはそういうの苦手なタイプか…

「その怪談というのは、どんな話だ？」

お…意外な人が食いついた。桐条さんが怪談話に興味あるとは意外だな。

「ちよっ！？どうせ作り話に決まってるし、き、聞かなくても良いと思いますが！鳴上君がせっかく美味しい料理作ってくれてるんだからそういう変な話はやめましょうよ。」

会話回避の手段に使われてるとしても美味しいと言われると嬉しいものだ。

「興味がある、話してみろ。」

真田さんまでが食いついたって事は何かあるのかな？

「う…」

流石のゆかりさんも年長者二人に出られると断れないよなあ…

順平さんは電気を消し懐中電灯でしたから自分を照らし語りだした。

「どうも、こんばんは、伊織順平アワーの時間です。」

ノリノリだなあ…

長くなるので割愛して内容を話すと

夜遅くまで学校に残っていると死んだはずの生徒、これが先ほどから会話に出てるオンリヨウ、に食われるという怪談があるらしい。そして昏倒事件にあった女生徒は前日の夜に学校付近で目撃情報がある。

だからこの事件はオンリヨウによる事件と…

「どう思う…明彦？」

「あら…？俺の熱演スルー？鳴上、お前まで適当に聞き流してなかった？」

大丈夫です、しっかりと要点は抑えています。

「オンリヨウかはともかく、調べる必要はありそうだな。」

「それはシャドウが関わっている事を考慮してと言う事ですか？」

真田さんの発言に宙さんが問う。

「そうだ、シャドウに関しては我々もまだわかっていない。怪奇現象は念のため調べておいて損はないだろう。」

桐条さんも忙しいのにさらに色々背負い込んでるな。

「しかし、ゆかりツチさ、お化け苦手とか、チヨイ情けないよな。」

俺としてはお化けが苦手って言うのは女の子らしくて可愛いと思うが…（それを口に出すには勇気が足りない）

そんな事を考えているうちにムキになったゆかりさんがこの怪談について徹底的に調べてこれがウソだと証明してやると息巻いた。

3年二人にとってもこの流れは好都合らしく完全に乗せられたみたいだな。

「鳴上君、一応中等科のほうでも話聞いておいてね。」

俺も巻き込まれて…

週末に情報収集の報告会が行われるらしい、俺も一応明日から聞き込みしてみよう…

## 6月1日（後書き）

おまけ

「エクセレント！」

カレーの感想らしい…

風花の料理に期待とか死亡フラグを立てつつ6月に入りました。  
伊織順平アワーの詳しい内容はペルソナ3本編をご覧ください。フルボイスで語ってくれますので…

ちよと風花加入の話が出るころに鳴上を加入させたのでその話を出すタイミングが無かったんですね。

今後も番外編を挟みつつ日付はイベントが起こるまで飛ばしていきます。

流石に毎日の細かい会話や行動を書いていたら書き終わりませんので…

ではここまで読んでいただきありがとうございました。

ご意見、感想をいただけると嬉しいです。

番外編 刑死者？（前書き）

## 番外編 刑死者？

SIDE 鳴上 悠

怪談の噂集め、やれと言われても高校での噂、中学生の俺では困難だ。

俺が情報を集めなくても問題が起こると思えないが…だからといって何もしないと言うわけにはいかないだろう。

ならばどうすれば良いか、まずは校内での調査を試みた。

俺は普段から校内で色々な相手と話しているため顔が広い。

まあ、話はするけど相手の名前は知らないっていうことも多いんだけど…（相手は俺の名前を知っているみたいだが）

まず最初の狙いは兄や姉が高等科にいる相手、これは話を通しておいてまた後日というパターンにしても良い。

次に熱心な部活動の学生。俺が所属している部活みたいに出て出なくても良い所は上下の繋がりが薄いが熱心に活動しているところは中等科、高等科通して繋がりがあある。ここは中高一貫高の強みだろう。

上は使えるやつは高校に上がってきたとき欲しいだろうししたは上と練習ができると互いにメリットがある。

特に熱心に部活やっているようなところは深夜に学校に起こる怪談というのは気になるだろう。

噂話、怪談が好きなタイプの人間は女性に多い。

学内での聞き込みは休み時間をメインに使う。放課後はそこまで遅くまで残る必要はない。

ゆかりさんが寮内の共用PCで掲示板とかは調べていたので俺は外



での聞き込みも行っことにした。

おばちゃんというのは古今東西噂話が好きという。しかもそれを広めることが好きだ。そのネットワークの広さは学生の比ではない。何故か高校の内部の噂話まで流れているくらいだ。まあ、昏倒事件とかは良い話のネタなんだろうな。

このように数日かけて噂関連の情報収集が一段落ついた俺の次の目的地は神社だった。

オンリヨウ、怪奇現象が起こったからには大げさに騒ぎ立てて神社に頼る人も出るかもしれない。

すでにかかるの量の情報を集めてはいたし、あとは真偽の検証もないといけないが（おばちゃんネットワークは情報量が膨大だが色々尾ひれが付く）まずは情報を集めるというのが俺のやり方だ。

余談だが俺の叔父には刑事がいる（どんな人かは記憶にないが）俺の聞き込み好きはその血筋だろうか…

そんな取りとめもないことを考えていると神社で、正確に言えば併設してある公園で、見覚えのある人が小さい女の子と遊んでいた。

「あ、鳴上君じゃない？こんなところで何をしてるの？」

「俺のほうは色々街中を歩き回っていたところですよ。」

流石に子供の前で怪談話は控えておきたい。嫌いな子はすごく嫌がるし。

「暇なら一緒に遊んでいこうよ！」

公園で遊ぶなんて何年ぶりだろうな

「ねえ、お兄ちゃんも舞子と遊んでくれるの？」

子供は嫌いではない、というよりも子供好きだと自分では思う（口リコンとかそういう意味では決してない）。高校に入れば学童保育

のバイトとかをやってみたいとも考えているくらいだ。  
俺は彼女の問いに頷きその日は調査を中止し遊ぶことにした。

しばらく遊んだ後に商店街、俺達は3人でたこ焼きを食べていた。  
…たこ焼き？かもしれない、たこ入って無いのもあるし…  
男としてはちよつと情けないかもしれないがこれは宙さんのおごりだ。

「お姉さんはバイトもしてるんだし、任せておきなさい。」  
だそうだ。確かに中学生の小遣いじゃあ買い食いだけでもそこそこの出費だしなあ…

「お兄ちゃんとお姉ちゃんって恋人？」  
この年でも女の子、そういうことに興味あるんだな。

「あはは、違うよ。学校の寮に一緒に住んでいる友達かな。」  
宙さんは信頼されて懐かれているみたいで俺も話を色々聞いた。  
この子は今は両親の離婚問題で悩んでいるらしい。

そして俺たちみたいに特殊な関係、家族じゃないのに一緒に暮らしているという関係に興味を持ったようだ。

高校生になればそういう生活があるってことを話して今日は別れた。

「舞子ちゃんには言わなかったけど私達の場合かなり特殊だよね。」  
男女同じ寮だし、俺は中等科だし…

俺が寮に入って別々に暮らしてるとはいえ両親健在で仲が良い俺は恵まれてるほうなんだろうな。

宙さんも両親をなくしているらしいし…

「ところで本当は神社に何しに来たの？恋愛祈願とか？」

…何か誤解されているようなので俺は理由を話しつつ寮に戻った。  
「じゃ、金曜日は期待してるね。」



## 番外編 刑死者？（後書き）

舞子コミュ+番長の情報収集話です。番長の聞き込みの上手さは4で仲間に（記憶によると確か雪子から）言われるほどです。

4のことを考えると番長って確実に子供の面倒を見るのが好きですよね。

菜々子は良い子過ぎるっていうのもありますがw

舞子とは宙を通して今後も書きたいです。今回は出会い編ってことで。

ではここまで読んでいただいてありがとうございます。

ご意見、感想などをいただけると嬉しいです。

6月5日（前書き）

日付は変わってしまいましたが寝る前に完成しました。

リアルに影時間があればその時間内に完成してたのですが…（その前に影時間はパソコンも動かなくてネットも駄目ですけどね）

6月5日

SIDE 鳴上 悠

今日は約束の情報確認の日。

俺も情報を集めたがゆかりさんが張り切っているので仕切りは任せることにした。

情報量はともかく情報の正確さでは高校のほうが確実っぽいしな。

「ハイ、では月曜に約束したとおり、集めた情報の確認回をしますッ。」

「おー、ノリ気じゃん。」

順平さんはこれは調べてなさそうだな…

「当然。私的には、バッチリ色々掴んで来たから。例の噂はやっぱリオンリヨウの仕業じゃないよ。」

「いやー、ゆかりが張り切って調べてくれるとこっちは楽で良いよ。」

「…もしかしてまじめに調べたの俺とゆかりさんだけじゃないのだろうか…」

「オンリヨウじゃないのが重要なんだ…」

人は未知のものに恐怖を抱くと言うからな。正体を知ってしまえば恐怖心はやわらく。

「まず、この怪談騒ぎのそもそもの発端からだけど…校門で倒れていた子の話は確かにちよつと怪談の内容に似てる。でも、一人がそういう目に遭っただけでこんな騒ぎになったのは、何故でしょう？」  
クイズ形式になったようだ、他の人たちがちゃんと調べているのかも気になっているっぽいな。

「そりゃーダイイングメッセージがあつたとかじゃない？ほら、ホラーによくあるじゃない、襲われる直前まで日記書いてたやつ。」

「あー。あるよな、書いてる間に逃げろってやつ。」

「違うから、そもそも被害者死んでないから…。」

「遊んでるな、俺が調べていることはこの前話したから知っている…遊んでる、俺に答えると視線向けてくるし…」

「被害者が一人ではなかったと言うことでしょう。俺の場合事実確認とかなでなくて噂頼りですが…3、4人と聞いています。」

「なんで中等科の鳴上君があんたらより詳しく知ってるのよ。そう、私も調べて驚いたわよ、最初の事件のすぐ後に二度も同じこと連発してたんだから。」

正解したようだ。おばちゃんの方は尾ひれ付いて10件とかの話もあったからな…学校で聞いた話が正格だったようだ、こういうときの情報の選択は難しい。

「怪談と同じ状況で3人ですからね。」

「うん、騒がれるのも当然ってわけよ。」

逆に考えれば3人異常な状況で倒れていることでもあるが

「え、では次。被害にあつた3人がクラスがバラバラで一見、何の関係も無いみたいに見えます。」

でも実は、水面下に共通点があつたの。その意外な共通点とは何でしょう？」

俺もこれを調べて驚いた。順平さんの怪談では倒れた子はそういうことする子じゃないということだったからな。

「何なんだよ、クイズ形式ですつとやるのか？被害にあつた3人の共通点って…？」

「ああ、よく出家してたって話だよな。」

出家は複数回するものではないです…俺の勘違いだった、この人絶対分かって遊んでる…しっかり調べた上で俺達の調査状況を確認してるのか？

「出家じゃなくて家出です。ちよくちよく家を出てて幾つかのグル

「プと関わっていたという話を聞きました。」

「鳴上君、よく調べられたねー。宙は明らかにふざけてるけど順平、あんた調べてないでしょ。」

「今回はたまたまです。高等科と繋がりのある知り合いも結構いるので。」

「お前顔広いんだな。」

まあ、でも実際こういう件は女子のほうが噂を集めやすいだろう。

「この3人、同じ状況で見つかってるんだから、この繋がりはずっとタイ何かあると思う。よって、更なる真相に近づくべく、現場取材を決行することにしたから。」

「は？現場取材？」

「現場ってことは不良のたまり場か？」

「被害者の3人が決まって夜明かした”溜まり場”ってのがあるらしいの。」

「お、おいそれ、もしかして、ポートアイランド駅前の裏入ったところ……」

あそこか！？結構危険なんじゃないか

「なんだ、知ってたの？」

「あそこヤバいって！」

「俺もそう思います。調べるためとはいえ危険な場所に入りますのは。」

順平さんの発言に同意する。俺と順平さんはともかく女性と一緒にだといざと言ったとき逃げられう保証がない。

「危険なの？なら尚更みんなで行かなきゃ。」

「いや、俺や順平さんはともかくゆかりさんや宙さんは危険だと思いますって。」

「って鳴上、お前は行く気かよ。」

「頼もしいじゃん。宙はどう？」

「倒れたのも女の子でしょ、大丈夫、なんとかなるって。」

うちの女性陣は怖いものなしと言うか……



「俺、行きたくねーなー…あそこマジ、マンガみたいに荒れてるんだよ。」

「無駄ですよ…あの二人ノリ気だと俺たちでは止めれませんし…それに拒否して女性達だけで行かせるわけに行きませんし…」

「そうだよなあ、まあ、いざとなったら逃げれるようにしておこうぜ。」

「決まりね。明日の夜に出発だから、そのつもりでよろしく。あ、鳴上君は中学生だし、寮にいたほうが良いかな？」

「おいおい、男が俺だけかよ！それは無いだろ！」

「この状況だと寮で待っているほうが不安なんで俺も行きますよ。」

「おー、鳴上君、男前じゃん、順平ともども頼りにしてるよ。」

「むしろ俺と順平さんの二人で行っても良いですよ。」

そのほうが穩便に済みそうな気がしたが却下された。

明日の夜か、何事もなければ良いんだが…

6月5日（後書き）

日付変更前にだして本日二本を目指しましたが間に合いませんでした。

原作の会話に調査を進めた番長が介入したというだけの話です。

宙は間違った選択肢をわざと選んで遊んでいます。

ここでは怯える順平の態度のほうが正常だと筆者的には思います。  
がここで向かって貰わないと物語進みませんしね。

ではここまで読んでくださってありがとうございます。

ご意見、感想などをいただけると嬉しいです。

6月6日(前書き)

今回は短めです。

6月6日

SIDE 鳴上 悠

予定通り今夜は路地裏に向かわなければいけない。

やたらと乗り気なゆかりさん。いかにも嫌そうな順平さん、なに考えているのか分からない宙さん。

「いや、鳴上、俺が嫌だつてもあるけどそれ以上に女の子二人を心配してるわけ。オンリヨウは駄目なのに不良は怖くないっておかしいとおもわねえ？」

「駄目とか言わない。見えないものは誰だつて気味悪いでしょ。」  
目に見えない恐怖と実際の脅威は別物だとは思うが…この辺の感覚は人それぞれなんだろうな。

「見えるほうが怖いだろうが！バットとか、光りモンとかさ！」

光りモンはともかくバットは多分携帯して無いだろう、目立つし邪魔だし。

「もう…フリヨーの溜まり場くらい何よ？鳴上君のほうが落ち着いてるわよ。」

「いえ、俺も怖いですよ、もう諦めただけです。」

「諦めんなよ！最後まで抵抗しろよ！」

「いつまでも言っでないで行くわよ。」

「あはは、危なくなったら守ってね、期待してるから。」

「お、おお、なんだよ、しょーがねーなあ！任せておけ。」

結局順平さんも上手く乗せられているな。女の子に守ってって言われると抵抗はできないのは確かだが

「ほら、鳴上、行くぞ！」

頼りにされているのが嬉しいのか、先ほども乗り気だ。  
まあ、決まったことに文句言うより良いだろう。とりあえず退路だけは確保しておく用にしよう。

辰巳ポートアイランド駅の近く、結構人通りもある。まあ、いわゆる不良の溜まり場というのではあるが全員が仲間同士というわけではない。

「…んだ、あれ？」

「つか制服…月高じゃん？」

制服は目立つと思い俺は着替えてきたが他の人はそのままだ。

「ヤベエ、想像してたよりずっとヤベエ。」

俺は想像したよりはましに感じる。これなら話の持って行き方しだいでなんとかなるかもしれない。

「とっと、お前らさ、遊ぶトコ間違えてんじゃねえの？」

「あ…いや、」

「お前らみたいなのが来ると場がしらけるんだ、帰れよ、ひげおくん。」

順平さんに任せるわけにいかなそうだな。俺が前に出ようと思ったがそれより先にゆかりさんが出る。

「ここ来るのに、なんで、あんたの許可がいるわけ？」

「ちよつ、おまつ、バカかよ！」

ヤバイな、この雰囲気は…

「オマエあれか！？空気読み人知らずか！？」

「なにこんな連中にビビってるのよ！」

こういうときに必要以上に怯えるのも挑発するのも駄目だろう。

「ああ！」

「”こんな連中”つつつたよ、そのコ」

「いやー、ごめんね、私たちまだこの辺慣れてないだけよ。」

「謝つてすむモンじゃないでしょ、こうなったらセクシーな写メとか取つつちやおうかしら。」

「こいつら、サイッテ…」

これは交渉相手を他に移したほうがよさそうだ。これ以上こいつら相手には情報収集は難しそう。

「もう行きましょう、この状況では目的果たせません。」

俺はさりげなくを装いゆかりさんと宙さんを後ろに庇う。

「待てよ、サイテー呼ばわりして帰れると思ってるのかよ。」

向こうが拳を振りかざし殴りかかってくる。がこれは予測の範囲内、一応日々シヤドウと戦っている身だ、拳で殴るのは慣れていないが避ける技術は人並み以上はある。

「てめえ、避けてるんじゃないやねえ！」

これはもう避けられないか…向こうに増援が来るかもと考えたら相当不利だ…

「その辺で良いだろ。」

そこに6月だと言うのにコートを着てニット帽を被った人がいた。

「しらねえで来てるんだ、俺が追い出す。良いだろ、それで？」

「バアカかテメーは。いまさらそんで済むかよ！てめえもやんぞ、コラ！」

俺たちと争っていた不良が殴りかかるがそれをあっさりとかわしたうえに頭突きを叩き込んだ。

「うおっ…っ、つええ…」

「ガキ相手にムキになってるんじゃないやねえよ。」

それを言うとうやく俺がかなりの年下と気付いたのか、それともこの人を相手にしてまで締めるような相手ではないと判断したのか「ちっ、もう良い、今日はここで引いてやる。」

「てめえ、確か荒垣真次郎、こいつらと同じ月高だよな、次はこうはいかねえぞ。」

連れ共々も捨て台詞をはいて去っていった。

「スゲーツス！先輩、つえーっス。」

「助かりました。ありがとうございます。」

「その顔：お前ら、アキの病室にいた：」

俺以外の3人はこの人と面識があるらしい。

なんでも真田さんが検査入院してお見舞いに行ったときに会ったらしい。

「バカ野郎が！帰れ、お前らの来るところじゃねえ。」

言葉使いは悪いが俺たちを気遣ってくれているようだ。

それだけ立ち去ろうとする荒垣さんをゆかりさんが止める。

「待つて！ごめんなさい：でも私たち、知りたいことがあつて来たんです。」

「：アキに言われてきたのか？」

「違います、私たちの意思で調べに来たんです。」

荒垣さんの問いに宙さんが答える。

まあ、真田さんは人にやらせるより自分で来るタイプだ。荒垣さんもそれを知っているんだろう。

「知りたい話つて何だ。礼の怪談とやらか？」

その後、俺たちは聞いた話によると倒れた女子生徒たちはやはりここに集まっていたらしいこと、そしてそいつらの共通点として『山岸』という同級生をいじめていたらしいことを聞いた。

その山岸さんは俺がこの前聞いた新しいペルソナ使いの山岸風花さんだということ、そしてその山岸さんが一週間前ほどから家に帰っていないということ、それが原因で犯人は山岸風花の”オンリヨウ”という噂もあることを聞いた。

「これはすでに怪談で済まされない問題ね。」

「担任つて江古田でしょ、このこと知ってるのかな。」

確かに、担任が知っていて上に話を通した場合理事長からこのことは俺達に知らされていたはずだ。

「そうか：アキのやつ……ったく、過去を振り切れねえのはどっち

だつてんだ……」

真田さん？荒垣さんは思ったより真田さんと古い付き合いなのか？  
なにか知っていそうだが……はつきりとは聞き取れなかったが……

「なんでもねえ……知っているのはそんだけだ。……もう良いか？」  
自分に向けられた視線に対して荒垣さんはそう答える。

「ありがとうございます。おかげで助かりましたよ。」  
俺たちは礼を言つて新垣さんと別れた。

言葉使いは悪いがすごく優しい人だったな……



## 6月6日（後書き）

荒垣さん登場。

情報収集の会話シーンは難しい、原作主人公はほとんど喋らないし…  
原作を少し変えるくらいが精一杯です、説明を受けるだけの場所は  
端折ってしまいました。自分の技量の拙さに反省。

さて、今回は満月の日ですね。そっちは上手く書けると良いなあ。

ではここまで読んでくださってありがとうございます。

ご意見、感想をいただけると嬉しいです。

6月8日？

SIDE 有里 宙

昨日は真田先輩や美鶴先輩に私たちの無茶な行動を説教された。なんとかなるかと思っただやっぱり無茶だったかなあ…

まあ、本当に乱闘になってもなんとかなると思うんだけどね。それでも無茶しただけの価値のある情報だったと思う。

今日は私たちは山岸風花の担任、江古田を問い詰めに職員室に向かった。

そこには先に来ていた美鶴さん、そして山岸風花いじめを行っていたもう一人の人物森山夏紀がいた。

彼女たちは5月29日に悪戯のつもりで体育館に閉じ込めた。

いじめ仲間の一人が夜中に様子を見に行ったらしいがそのまま帰ってこなくなり怪談の被害者になったわけ。

わりと深刻ないじめだがここの学校が普通の学校ならまだましだったけど…この学校は影時間にはタルタロスになるのよね…

結果として山岸風花は行方不明になっちゃったってわけ。

恐怖という理由もあると思うけど森山夏紀は反省をしているみたいに見える。問題はその事実を知っていながら隠していた江古田よね…生徒の将来のためとか言い訳をしていたけど…結局は保身のためまあ、その後美鶴さんが切れてたし…多分何かの処分下るだろうなあ…権力者を怒らせてはいけないよ。

そしてもう一つの重要事項、今回の事件の被害者は全員妙な『呼び声』を聞いたと言うことだ。

つまり今まで無気力症の被害者を事前に知る方法は無かったが『呼

び声』という手掛かりがあるということがわかった。  
つまりシャドウの被害は偶発的な事故ではなく明らかにシャドウが人間を狙っていると言っていることになる。

私たちは森山さんを寮で保護することにし、放課後に山岸風花救出作戦を練ることを約束し教室に戻った。

SIDE 鳴上 悠

「今夜、この学校への侵入作戦を行う。目的は山岸風花の救出だ。」  
事前にメールで昼休みに行われた尋問については知らされていたので驚きはしなかったが…

わざわざ高校に呼び出されるとは思わなかった。

多少は目立つが放課後なら入れないわけではない。校門まで順平さんが迎えに来てくれたし。

「あの、イマイチわかんないんすけど、山岸って、ガッコの中にいるんすか？」

「しかも、なんで夜に？0時になったら、学校は…」

順平さんやゆかりさんは疑問に思っているようだ。確かに、俺も疑問に思うところだ。

「0時に学校にいたからってことじゃない？だから正確には学校ではなくタルタロスにいるそういうことですね？」

宙さんが答え桐条さんが補足する。

「その通りだ、山岸は学校がタルタロスに変わったときそのまま迷い込んだのだろう。」

「じゃ、まさか山岸さんって体育館に閉じ込められてからずっと…」  
「…そうだ。」

「そんな！10日も前の話じゃないッスか！」  
「10日か…わりと絶望的な日数に思える。」

「それ…どう考えても…」

普通に考えればもう手遅れだろうな…

「いや、悲観するのは早い。」

暗くなったところで真田さんが口を開く。

「タルタロスは影時間の間しか現れない。なら山岸風花は、日中は何処にいると思う？」

「言われてみれば…」

「こいつは仮説だが、恐らく山岸はあるときからずっと影時間に居るんだ。つまり10日といっても、山岸にとつては影時間を足し合わせた分しか時間が過ぎてない。生存の可能性はある。」

確かに、タルタロスや影時間に関してはまだまだ謎が多い。希望的観測ではあるが可能性はありそうだ。

「おおっ、マジッスか。あ…でも影時間って慣れた俺らでも居るだけで結構バテるじゃないスか。あれを10日ぶつ通しつてのは…」

「そういえばそうね、それにたとえ見つかった場所によつては辿り付けるかどうか。」

順平さんとゆかりさんが不安要素を挙げる。

「なら、このまま見殺しにするかっ！」

「見つかるかどうかに関しては手段はあるわ。」

それらの発言に対して宙さんが口を挟む。

「だからわざわざタルタロスではなく学校に侵入するって話が出たわけ。ですよね？」

そういうことか

「つまり俺たちも山岸さんと同じ方法でタルタロスに…具体的には体育館で影時間を迎えるということですか。」

そうすればたどり着けないということにはならない、彼女も移動し

ている可能性もあるがそこら辺は論じても意味のないこと。

「そういうことだ。」

「危険性はある。正直に言えば私はこの作戦には諸手をあげて賛成はできない。最悪二重遭難という可能性もある。しかし」

「助かる可能性があるのに、放っておくことなんてできない…」

真田さん結構熱い人なんだな。なんていうか…今までわりと空気に目立たない人だったが

「…後悔はしたくないんだ。お前らが行かないなら俺一人で行く。」

「私も行きますよ。もとより危険は承知のうえで入部したわけですし。」

「…まあ、そうですね、助けられる可能性があるのに放っておくわけにいきませんし。」

宙さんの意見に俺も続く。

「わかった。危険は承知だが、このまま放置するわけにいかないからな。」

「そうですね、やってみないとわからないし。」

桐条さんとゆかりさんも賛成し作戦の決行が決定した。

「おし…夜の学校に侵入か！へへっ。そうと決まればあれだな…」

「順平さん、何をするんですか？」

「侵入って言ったらアレだろ。俺に任せておけて。」

順平さんが自信満々で侵入のための仕込をすると言って去っていった。

## 6月8日? (後書き)

執筆の時間的都合も含めて今回は分割します。

明日上げることが目標にします。

結構読んでくださっている方もいらっしゃるようで嬉しいです。

PVアクセスももうすぐ2万に届く勢いですし。

ちなみに作中で真田を空気呼ばわりしてますが全て私の責任ですね。人数多くても回せる作家さんはすごいと思います。

筆者はP3Pやってからはわりと好きなんですけどね、昔はタルンダ先輩呼ばわりされていましたが『直接指示する』だと低下系キャラは便利ですし…

ではここまで読んでくださってありがとうございます。

ご意見、感想などをいただけると嬉しいです。

6月8日？ FULL MOON

SIDE 鳴上 悠

作戦決行前の寮、俺たちは全員準備を済ませて集まっているのだが……どうやら理事長に連絡が取れないらしい。

俺の両親を説得してこの寮に入寮することを決めたときは少し見直したがまた俺の中で『使えないおっさん』の称号に逆戻りしそうな感じがする。

「まあ、いいんじゃないですか？」

ゆかりさんの発言に同意だ、あのおっさんいらないだろう、どうせペルソナが呼び出せないわけだし。

「一つだけ面倒がな。理事長の口添えがないと夜の学校にどう入ったものか。」

……こういうときにいないとはどれだけ駄目なんだ……

「それ、ご心配なく。その事なら『仕込み』が済んでマス。」

仕込み？ そう言えば順平さん作戦会議の後何かやってたな。

「仕込み……？ 爆弾か？」

……桐条さんがさらつと物騒なこといつてる……

「鍵開けといたってただけなんだけど……」

「昼間のうちに鍵を……ブリリアント！」

お約束だが有効な手段だ。順平さんが昼間のうちに開けておいた窓から俺達は学校に侵入した。

夜の学校に山岸さんが放置された件といいわりとこの学校セキュリティ

テイ緩いな。

順平さんはブリリアントの意味が分からずほめられていることが良くわかってないようだったが…

とりあえず侵入したは良いが体育館の鍵は掛かったままだ。まずは鍵を入手しなければいけない。

可能性は職員室か校務員室。二手に分けて行動して探すことになる。

「職員室のガサ入れか…テストの問題あるかも？ウヒヒ…」  
余計なことは口に出さないほうが良いと思う…

「私の目の前で不正の算段か？事実なら処刑だな。」

本気なら黙ってやるべき、冗談なら相手を見てやるべき、どちらにしろこれはなあ…

「う、嘘に決まってるじゃないスか、嫌だなー、もー。」

どちらにしろ中間テストが終わったばかりの今の時期、テスト問題なんて老いてないと思うが。

「…なら、伊織は私と校務員室だな。鳴上、この学校のテストと無関係な君はそちらに行ってくれ。あとはそちらに何かあったときの指揮官として有里も。あと明彦か岳羽、どちらかを連れて行け。」

「あ、それじゃ、ゆかり、一緒に行こうか。」

「ということでこちらのメンバーは俺と宙さん、そしてゆかりさんとなった。」

「おい、鳴上、もしテストが見つかったら俺にこっそり…」

「伊織」

「なんでもないです…」

「順平さん、そもそも俺では見つけることすら難しいですから。表記されていなければどれも俺にとっては習っていない内容、どの学年か区別が付かない。職員室の席の配置すら分らない。」

「はあ…しかたない、諦めるか…ゆかりツチや宙ツチはやってくれそうにないしなあ…」

「実力でがんばってください。」



「あのさあ、ゆかり、こういう潜入ミッションのときは普通携帯の電源切らない？」

職員室に向かう途中、俺達は一度警備員に遭遇しそれをやり過ごした直後にゆかりさんの携帯が鳴り出したのだ。

俺としては狭い柱の影に女性二人に挟まれて隠れたのでそれどころではなかったが…

「し、仕方ないじゃない。」

「せめて迷惑メールに対して着信拒否くらいしなよ。それにビビりすぎ。」

「ふ、普通この状況でいきなりなったらビビるでしょ！鳴上君もそう思うよね。」

この状況で俺にふられるのは勘弁して欲しい、女性二人に挟まれるのは気まずい…

「ま、まあ状況的に仕方ないと思います…」

ここであまりゆかりさんを怒らせないほうが良いだろう…俺は二人を宥めつつ職員室に向かった。

職員室、鍵置き場はあっさり見つかったが暗い中では鍵のタグを見極めるのが難しい。

「ねえ、鳴上君、この鍵なんてかいてある？」

「えー、ゆかり、なんで私じゃなくて鳴上君頼るのー？」

「あんたは絶対適当なことと言って私を驚かすでしょ…」

「あはは、ばれた？」

安心なことにさっきのことは引きずってないようだ。

「えっと、体育館ですね。」

俺達は無事体育館の鍵を見つけ戻ろうとした。

「ところでさ、冗談抜きで思ったんだけど。」

「またなにかからかうつもり？」

「いや、まあ、ふと疑問に思ったけど…ここの隣って保健室よね？」  
「それがどうしたのよ？」

「いや、保健室の責任者ってあの江戸川先生でしょ？」  
話が見えない…

「本当に何か出そうで私も怖くなってきたんだけど…」  
「う…確かにあの先生なら何かありそう…」

江戸川先生というのは保険教諭も兼任してるらしいが…授業であやしいことを話す先生らしい。

俺達は急ぎ足で合流地点に向かった。

「鍵は見つけましたよー。」

俺たちが行ったときすでに桐条さんたちは合流地点に居た。

途中順平さんがゆかりさんをからかう場面もあったが無事目的を果たしたので次の段階に移ることになる。

「よし、改めてチームを二つに分ける。4人がそのままタルタロスへ突入、私とあと一人が外でスタンバイだ。影時間に入ったら私が位置を割り出す。」

なるほど、今回の作戦上念のためバックアップのほうにも一人動ける戦力を置くということか。

「俺は突入班に入る。」

真田さんが真つ先に名乗り上げる。

「それと、お前も来い、有里。また仕切り役をやってもらう。」

突入組のリーダーは宙さん、妥当だと思う。

「俺も連れて行ってください。もし強敵に遭ったら俺の援護能力は役に立つと思います。」

俺も突入組に名乗りを上げる。

「あ、じゃあ、4人目は私で…！」

「타임、タイム、ゆかりッチ。ほら、俺、前にモノレールんと

き実力出せなくてメーワクかけちったじゃん？恩がえしつつかさ。汚名挽回さしてくれよ。」

汚名は返上です、または名誉挽回

「そうだね、ゆかり、回復の魔法があるゆかりと鳴上君は分けたほうが良い。今回は順平に来てもらうことにしよう。」

リーダーらしく宙さんがそう決断する。ゆかりさんは桐条さんと二人になるのは躊躇いがあるみたいだったけどそう口にも出せず男3人？宙さんに決定した。

「そろそろ時間だ。」

「行くぞ。」

## 影時間

ここは…どこだ？

影時間を迎え俺達は体育館に待機し、タルタロスに突入したはずだ。

「はじめまして、イレギュラーの少年よ、君は自分の名前が言えるかね？」

タルタロスとは違う狭い部屋…俺の目の前には仮面を付けた男がいた。

「名前？鳴上悠だが…あんたは？」

怪しい仮面の人物だが俺は何故か名乗ったほうが良い気がして正直に答えていた。

「私の名はファイルモン、本来はここに来て自分の名を名乗ることができる強い精神力の持ち主にペルソナを与えているものだ。」

ペルソナを与える…？

「そう、本来ならここにはじめて訪れるときにペルソナ能力を得る。そして君達のような自らペルソナに覚醒したものはここには来ない。」

「ならなぜ俺はここに？」

「君がイレギュラーな存在だから。本来君はこのとき、この場所には居ない人物。別のきっかけで別のペルソナに目覚めるはずの者。」  
…何を言ってるのかさっぱり分らない。

「私がここに君を招いた理由。君はまだ契約を果たすときではない、しかしこの試練に君が挑むことになったからには今の力では足りないだろう。君も有里宙と同じワイルドの力を持つもの。」

宙さんと同じ…？俺にも複数のペルソナを扱うことができるというのか？

「その通りだ、だが今の君では限度がある。人との絆借りること、そうすることにより君の可能性を増やすことができる。」

俺の心を読んだみたいに答える…

「さあ、そろそろ行くが良い。」

「う…夢…か？」

少しの間意識を失っていたようだ。何か夢を見ていた気がする…夢なのか…？なんかやたらと現実感があつたな。

「な…み、聞こ…か？」

桐条さんからの連絡が入るが、ノイズが多くて聞き取りづらいそれにタルタロスに入ったときに他の人たちと逸れたのか姿も見えない。

「バラバラに…それぞれが行動し…探してくれ。」

それだけが聞こえ音が途切れる。

どうやらバラバラに飛ばされてしまったので単独で仲間と山岸さんを探さないといけないようだ。

俺のペルソナは単独行動には向かないが…そうも言っていられないか。

自分の装備を確認し（武器はタルタロスで見つけた数珠丸恒次、防

具に多機能エプロン、足にはハイテクサンダル）…やばい、自分で不安になってくる…回復アイテムも持っているがそっちは自分の魔法で補える。

少々時間は掛かるかもしれないけど…まあ、がんばって進もう。

俺は地道に戦いながら少しずつ探索を進めていった。

そのうち不思議な声も聞こえてくることに気付く。

「人がいるの…？」

この声は山岸風花さんか？声が聞こえるといっても位置の特定は難しい、俺のペルソナにも探索能力があればなあ…直感に従い俺は進んでいく。そうすると見覚えの無い少女が目の前に居た。

## 6月8日？ FULL MOON（後書き）

すみません、3分割することになってしまいました。

今回はオリジナル展開を挟みました、

ファイルモンが登場したらペルソナ3と4だけのクロスではないと言われそうですが…

正直今回の展開はすごく悩みました。

でも作者的にどうしてもやりたいことがあったのでこうすることにしました。

ではここまで読んでくださってありがとうございます。

ご意見、感想などをいただけると嬉しいです。

次の話もなるべく早くあげようと思います。

6月8日？ FULL MOON

SIDE 有里 宙

私はタルタロスに入ったときは仲間たちと逸れたが無事真田先輩と順平とは合流できた。

そこで道中で聞こえた声に対して相談していた。

あれは恐らく山岸さんだろうけど…それはそれとして鳴上君は無事かなあ。援護タイプが単独行動ってわりと危険だね。

そう考えていると…

「あ…！」

青白い顔した女の子が通路から出てきた。

「山岸風花か？」

真田先輩が尋ねる。

「はっはいつ！えっと、あなたたち、鳴上君って子の仲間…ですよ  
ね？」

「鳴上に会ったのか？」

「はい、鳴上君はあなたたちと早急に合流するため道中に居る怪物を引き付けてて…」

「なに！？どこだ、俺たちも行くぞ！」

SIDE 鳴上 悠

「なるほど…つまりなんとなく気配を感じることできる、そういうことですか。」

俺は無事発見することができた山岸風花さんに事情を聞いていた。

「うん、それでここってどこなの？私学校にいたはずだけど…」

最初はひどく警戒されていたが（刀持ってエプロン付けてサンダルはいた男なんて不審者以外のなんでもない）俺が彼女を救出に来たものと説明し、なんとか納得してもらえた。もし俺の伝達力が低かったら危なかったな…

そのとき俺が年下ということも話した成果言葉使いも砕けたものになった。

「詳しいことは後で説明します。それより他にも仲間が居るんです、オチらと合流しないと…位置とか分かりませんか？」

もし彼女の話の通り彼女のペルソナに探知能力があるなら闇雲に歩きまわるよりは確実だろう。

「位置…なんとなくわかるけど…」

彼女の説明を簡単に図解化すると

俺達    シャドウ    宙さん達

こういう配置になっているらしい。遠回りするルートがあるとは限らない上に彼女たちも動くだろう。あまり遠くに行き過ぎると探知範囲からもれるかもしれない…

「わかりました、では…」

作戦は単純、俺が敵をひきつけている間に風花さん（名前で呼ぶ許



可は貰った）が宙さんたちを呼んでくる。

ルート上にいるシャドウは一塊で俺がなんとか引き付けることができた。

…が

「まさか別方向から増援が来るとは予想外…」

こういうときに攻撃する手段が剣だけなのが辛い…

「はっ…」

しまった、こいつ…剣が通じない…くそ…時間を稼ぐしかないのか…

『我は汝

汝は我』

…な…これは…セイメイではない！？

『私はあなたの心の海より出でしもの  
水の中で生きるもの…アプサラスなり』

俺の頭で先ほど見た夢が蘇る

「人との絆を借りること、そうすることにより可能性を増やすことができるだろう。」

そして頭に浮かぶのは先ほど協力体制をとることになった山岸風花さんの顔…

俺は目の前に見えた可能性、アプサラスに自分のペルソナをチェンジする。

「来い！アプサラス」

アプサラスの持つ能力氷の力を持つブフを放つ。

敵が凍りつき転倒する…よし！いける、俺は新たな力アプサラスとセイメイ、二つの力を使い戦いを続ける。

SIDE 有里 宙

私たちは山岸さんに連れられ鳴上君の救出に向かった。

「アップサラス！」

これは…ペルソナチェンジ！？鳴上君にもワイルドの力があるのは分かっていただけど…この状況で目覚めたの！？

「おいおい、鳴上にも複数のペルソナがあるのかよ、聞いてないぜ。」

「そんなこと言っている暇か、助けるぞ！」

確かにそうだ。私たちはそのまま敵の掃討戦に入った。

「鳴上、お前も複数のペルソナを扱うことができるんだな。」

敵を殲滅し鳴上君と合流した後私たちは彼に話を聞いていた。

「ええ…ですけど宙さんほどの能力は無いようですね…俺では宙さんほどの数が無い上にセイメイ以外の力はほとんど成長もしません。」

新しい能力に目覚めたばかりで使いこなせていないのかな？

「焦ったぜ。お前もものすごく強くて俺ツチの立場無いくらいになるかと思った。」

「あはは、他のはあくまでサブレベルの能力ないようです、基本セイメイの力で戦うしかないようですね。」

「それより早く脱出するぞ、山岸の体力も心配だ。」

「そうだ、風花さん、助けを呼んできてくれてありがとうござい  
ます。助かりましたよ。」

「助けてもらったのは私のほうだよ。ありがとうね、鳴上君。」  
私たちは話しながら戻ることにした。

SIDE 鳴上 悠

俺達は無事合流しタルタロス内部で見晴らしの言い通路を歩いてい  
た。

けっこう高いところなんだな

「月、デカツ！！明るッ！！」

丸い月が大きく見え、とても明るい。

「…ってか。こんなにぎらぎらしてたっけか？」

「前の満月のときもこんなものでしたよ。」

俺が初めて影時間を体験したときだ。はつきり覚えている。

「前の満月だと？」

「ええ、俺が初めて影時間を体験したときですから。」

「お前が初めて体験したときだ！？あれは確か大型シャドウが出  
たときだったな？」

「な。なんスか！？それがどうかしたんですか？」

「おい、有里、4月に寮が襲われたとき月を見たか？」

「え…？たしか…丸かったような気がしますけど…」

真田さん…？何かに気付いたのか？

「今日が6月8日…大型シャドウとの戦いのときが5月9日…寮の

襲撃は4月9日…全て満月だ！」

え…つと…どういうことなんだ？

「美鶴、聞こえるか！？」

先ほどより通じやすくなった通信機に真田さんが呼びかける。

「…明彦か…シャ…ウが…」

「おい、聞こえているのか？返事をしろ、美鶴！」

「…気をつけ…」

通信が途切れた

「美鶴！？おいっ！」

「なに…これ…」

風花さんが何かを感知した？

「今までのより…ずっと大きい…しかも…人を…襲ってる…」

「もしかして…大型シャドウは満月の夜に来るってことですか？そして今下に！？」

「おそらくはな、急ぐぞ！」

宙さんの発言に真田さんが答える、満月にそんな規則性があったのか、俺達は急いでエントランスに戻った。

「美鶴！」

俺たちが戻ったときにはすでにゆかりさんと桐条さんは負傷していた。

相手は大型のシャドウが…2体！？

「これは…！？」

「真田さん、シャドウの気を逸らさないと！」

「分かっている！…貴様らの相手はこっちだ！」

相手の注意をこちらに向けさせようとする。

「明彦、気をつける…こいつら…普通の攻撃が効かない…」

くっ…確かに言われたとおりだ…剣できりつけるも魔法を放つも通じない…

そうして威嚇をしてこちらに注意をひきつけている…なんで一般人が影時間に!?

誰かがタルタロスのエントランスに入ってくる。

「ふ、風花…」

「ばかなっ、何故来た!?’

入って来たのは…寮に保護していたはずの森山さん!?’

「逃げてっ!!ここは危ないから!!」

風花さんが声をかける。

「わ…私、あ、あんたに謝らなきゃって…」

って見てる暇じゃない!シャドウの攻撃は続いている。順平さんが二人を庇って負傷する。

「森山さん!私が…守らなきゃ!」

あれは…念のために持つてもらっていた召喚機!?それに彼女は俺が召喚をしているのも見ているはず…

「山岸さん…!?’

ゆかりさんが声を上げる…ペルソナを召喚している!?’

「私…見える…私…あの怪物たちの弱いところ…なんとなくだけど…見えます…」

やはりか…

「思ったとおりだ。」

そう…風花さんのペルソナは探知系…おそらく探知能力は桐条さんより上!

「美鶴。バックアップは彼女が代わる。こいつらは俺たちが片付ける!」

真田さんに合図で俺達は戦闘に突入する!

「おっけー、それじゃあ山岸さん、あいつらの弱点を探って、掛かるであろう時間は…私達が稼ぐ」

敵を探る能力…アナライズができるといっても多少の時間は掛かる。

まずは俺たちがその時間を稼ぐ。

「とはいっても…ひきつけてる間にけっこうダメージも負ってるぜ…」

その通りだ…しかし時間稼ぎなら…『アプサラス』をつけて宙さんと会ったときわかった、この力の使い方が、俺は宙さんのほうを見る。彼女も俺を見て頷く。

「アプサラス！」

「オルフェウス！」

「カデンツァー！！」

ミックススレイド…二つのペルソナの相性があつたとき特別な力を発揮する！！

俺達全員の体力、傷を癒しかつ、回避能力を増す！

「お、すげえ！」

「これは助かる！」

「よっし！これなら時間稼ぎくらい余裕だぜ！」

俺達は敵の攻撃を回避しながら風花さんの分析を終えるのを待つ！

「敵、女帝タイプ、魔法は効きません、打撃で、逆に敵、皇帝タイプ物理攻撃は効きません、魔法で！」

おかしいな、さっきそれで攻めたはずだが…まあ、良いそれが判明したのなら…

「順平、鳴上君と女帝タイプを！真田先輩は私と一緒に皇帝タイプに攻撃！」

「おっけー、任せておけ！」

「了解だ。」

アプサラスでは力不足…だから俺はセイメイにペルソナを変え物理攻撃が得意な順平さんと組んで攻撃を仕掛ける。

真田さんはわりと万能タイプ魔法攻撃力もかなりある、宙さんは言うまでも無くオールマイティ。

「よっし、鳴上、援護しろ」

「はい！…セイメイ、タルカジャ！」

攻撃能力を上げる魔法タルカジャで順平さんを強化し攻撃を仕掛ける。

向こうも剣を振り回し攻撃を仕掛けてくるが…

「メディア！」

負傷しても俺は癒し、順平さんが攻撃、よし！この連携ならいける！

…と思っただが…

「うお、急にこいつ攻撃効かなくなったぞ。」

「こっちもよ！」

急に俺達の攻撃が通じなくなったと！？

「風花さん！もう一度分析を！」

「う、うん…え！？さっきと弱点が変わってる、先ほどど反対女帝タイプには魔法、皇帝タイプには打撃で！」

とは言っても…

「そう簡単に相手はシフトできねーぜ」

そう、後方支援の俺はとにかく前線で敵を抑えている順平さん、真田さんが相手をシフトするのは難しい。

「くつ、戦えないことは無いがわざわざ非効率に戦うのはな…」

「鳴上！ここは俺が抑える、お前は3人で先に向こうを落とせ！」

順平さんが苦戦しながらも俺に言う…くそっ…相手に隙を作れば…順平さんを一人放っておくわけには…

『我は汝

汝は我』

これは…！？

『オイラはお前の心の海より出てきた水』

新しいペルソナ…順平さんを救おうと願ったときに生まれたのか…

『オイラはジャックランタン、オイラはオマエでオマエはオイラだホー』

こいつらの力は…宙さんのほうを見る、彼女にも俺に宿った力を感じ取れるのか頷く

「ジャックランタン！」

「ジャックフロスト！」

「ジャックブラザーズ！！」

俺達のペルソナ…雪だるまのジャックフロストとかぼちゃのジャックランタン…2体が現れシャドウに向かう！！

「ヒーホー」

「ヒホヒホー」

どこからとも無く現れたマイクセット…二人が…ヒホヒホ騒ぎ出す  
「か、可愛い…」

支援の風花さんが思わず言葉を漏らす…確かに妙に愛嬌あるなあ…  
ジャックフロストってUFOキャッチャーのぬいぐるみで見たことがあるし…

敵のシャドウはあっけに取られている…

「順平、真田さん、今のうち！」

俺は一緒に動きの止まった二人に声をかける、そう、この2体が揃うとシャドウでさえも気を逸らされる！

「おう！」

「任せておけ！」

とは言っても何度も通じる手段ではない…が…

「このチャンス逃しちや駄目よ！総攻撃開始！！」

リーダーである宙さんの号令で俺も剣を構えジャックブラザーズにより出来た隙を付きいつきに攻勢をかける…いける！

「順平さん！」

「おう、行くぞー！！」

最後に順平さんと同時に攻撃を仕掛けシャドウに止めをさす…よっ



し、終わった！！

大型のシャドウを2体倒した…今日のところはこれ以上出てこないようだ。

風花さんは影時間に10日分居たのに力を使ったせいで気力を使い果たしたのであろう、その場で倒れる。

先ほど乱入してきた森山さんは風花さんを心配しているようだ。

いじめを行っていたと聞いたが本当に反省しているんだろう…

彼女はペルソナ使いではないためここでの記憶は忘れるらしいが…これを見る限り心配なさそうだな。

ひとまず事件解決、これで一安心かな。

S I D E    有里    宙

事件は解決した。それに満月の夜に事件が起こるという事実、私はこれを知っていた。

正確にいうと知らされていた。私の部屋で影時間に訪れる謎の少年が『満月の晩に試練がある』と警告を受けている。

それに鳴上君は夢で仮面の人物と会ったのがきっかけで複数のペルソナを操る力を得たらしい。

会った人物は違うが私もベルベートルームに夢の中で招かれた。

ペルソナとは心の力、何か関係あるのかな…もしかしたらあの少年も私の夢に出てきてる？

彼と会っているとき起きていたなんて保証はどこにも無い、客観的  
事実無いからね。  
まだまだ謎は残されているなあ…

## 6月8日？ FULL MOON（後書き）

とりあえず？をあげたあと必死に書き上げました。

前のあとがきで書いた私のやりたかったことは二人のワイルドのペルソナ使いによるミックススライドです。

一人で複数のペルソナを同時召喚するより二人のキャラで放つほうがこっちいいんじゃないかと思っただけです。せっかくワイルドの能力者が二人居ることですしね。

当初はペルソナ4編までミックススライドのネタは温存しようかとも思っただけですが我慢できませんでした…そこまで続けることが出来るのか、ペルソナ4編を書くかどうか分からないですし…

まあ、この理論で行くともしこれがP4編まで続いた場合相棒や恋人候補の女の子たちを差し置いて完二のタケミカツチと雷神演舞を放つことになりませんが（笑）

そしてやっぱり最初はオルフェウスの出番でしょうと考えると女教皇のアルカナのアプサラスになったわけです。風花とまだそこまで親しくないのに使えたのはちょっと強引かなとも思います、そこは筆者の未熟さです。

ではここまで読んでいただきありがとうございました。

ご意見、感想をいただけると嬉しいです。

今回は特にミックススライドの件でオリジナル要素を出してしまったので意見はいただきたいです。

一区切り付いたので今後少し更新ペースは遅くなります。

6月11日（前書き）

今回はすごく短いです。

大きなイベントまでは日常的な短編が続くと思います。

6月11日

SIDE 鳴上 悠

作戦は終わったがあのときの疲労で風花さんは昨日までは入院していた。

知った上で自ら完全に制御してペルソナを出したわけではなく突発的な事態で召喚を行ったので普通よりも負担が大きかったんだろうと言う話だ。宙さんも最初に召喚した時はしばらく寝込んだらしいし、だがあれから3日、どうやら回復したらしい、そのことで話があるということ。今日は作戦室に呼び出されている。

そして作戦室、俺達の他に風花さんと寒い大人こと理事長の幾月さんが揃っていた。

どうやら順調に回復しているようだ、あの時と比べて顔色も良い。まずはあの時居なかった幾月さんと風花さんとの挨拶から始まる。

昏倒事件の犠牲者たちが無事と言うことの報告を受け、そしていよいよ本題に入る。

桐条先輩、真田先輩は相変わらず熱心なオファーだ。対照的にゆかりさんは無理しないで自分の意思でと言っている、

「オマエが入るときも中での意見はこんなもんだったぜ。」

と順平さんに耳打ちされる。

「私やります、やらせてください。」

即答してますね、まあ俺も答えを出したのは遅い時期だったが決めたのはわりと早かったけど。

入寮に関しても問題ないらしい。学園から御両親への説明も俺という実績あるしな。

「同じ学年だし女同士だし仲良くやろうね。」

「はい、よろしく願います。」

2年組みは女3人に順平さんだけ男、肩身狭そうだなあ…

女性率が高いし…部長は桐条さん、リーダーは宙さん…男の発言力弱いよね…

そして次の議題は満月について、研究者としての立場から幾月さんは真田さんの仮説…満月の夜に大型シャドウが出るという説が正しいという。

来月以降の指針となるだろう。常に緊張状態より決戦日が分かっているというのはやりやすい。

「うーん、ゆかりツチとは対照的…清楚でおしとやか…いいねー、新しいタイプの投入！」

風花さんが帰ったあと（入寮が決まったといっても引越しはまだなので）順平さんが喜びの声を上げる。

「今まではカップラーメンか、鳴上の手料理だけだったけど食生活変わるかもよ？」

現状で風花さんが料理が出来るかどうかは確定していないと思うが…

「なに言ってるんだ、鳴上、ああいうタイプは料理できるんだよ、俺には分かる。」

「へー、じゃあ順平はもう鳴上君の料理は食べないってことで良いのかな？」

「いやいや、それとこれは話が別だろ、鳴上の作るメシ美味しい！」

でも実際に俺の料理の負担が減ると良いんだが…

それが…惨劇の始まりとは…このときは想像もしていなかった…

## 6月11日（後書き）

作戦日が終わって風花仲間に参加イベントと日常のニコマ。

これを書くために平行してP3Pもやっていて順平との会話から最後のを膨らませました。ゲームは前の周回でベス様を倒したデータなので本当にこの作品のためだけに進めているデータなんです。まあ、ここからはのんびりペースで更新していきます。

では読んでいただきありがとうございました。

ご意見、感想をいただけると嬉しいです。

最近アクセス数やお気に入り登録数が増えててすごく嬉しいです。

6月14日

SIDE 鳴上 悠

俺は…俺達は予想外のところで最大の危機を迎えていた。

発端は簡単、6月12日、風花さん引越しのための部屋の準備、使われていない部屋だったので掃除を行った。しかしこのとき女子の部屋と言うことで俺と真田さん、順平さんは立ち入らせてもらえなかった。

6月13日、俺は前日に活躍できなかった分風花さんの歓迎のために手料理を振舞った。

そのときに順平さんが言ってしまったのだ、禁断の言葉…『女子の手料理が食べたい』と…

そして本日、6月14日、桐条さん是不参加だが…宙さん、ゆかりさん、風花さん、3人がそれぞれ料理をした…

そして料理を持ってきたときの宙さんの恐怖に染まった表情とゆかりさん、風花さんの自信ありげな表情。

宙さん以外の料理から立ち上る恐ろしげな妖気…俺達…俺、真田さん、順平さん、そして普段は居ないのに運悪く（というよりも風花さん入寮だからだろうが）居合わせた幾月さん…

「順平、待ち望んでいた女子の手料理だ、遠慮することは無いぞ。」  
恐怖に駆られた真田さんが口を開く。

「いやいや、昨日料理振舞ったのは鳴上だろ、まずはお前から行くべきだろ。」

順平さん、俺に押し付ける気か！？

「いえ、年長者より先に手を付けるわけにいきません、幾月さん、



どうぞ。」

俺はまだ死にたくない。

「僕はここに来る前に食事取ってきたからね、真田君、遠慮することはないよ。」

平然と嘘をつき逃げようとする…互いに牽制をしあい誰も手を付けない…

これをムドオン料理などと呼ぶのは甘い！ムドなら闇態勢のあるペルソナで挑めば良い。ただの即死ならホムンクルスを準備すれば良い。

なんていうか…これは見ただけで恐怖を与え食せば万能属性即死効果、防ぐ手段なしって感じがする。

「どうしたんですか？遠慮せずにどうぞ」

邪気の無い笑顔が怖い…味見したんでしょうか…？

「ごめん、私には助ける手段は無い。」

いや、宙さん、助けてください。

「順平、あんたが望んだんだからいい加減食べたら？」

…これは殺人事件になるのではないか…

「そ、そうだ、真田さん、この料理から逃げるんですか？」

膠着状態に陥った俺たちに順平さんが言う…

「逃げるだと？俺はどんな敵からも逃げん！」

勇者だ…まあ大魔王クラスのこの手料理からは逃げれ無そうだが…

大魔王からは逃げられない、この事実を前に俺も覚悟を決めた、食べずに済ませることは無理そうだし…

「それじゃあ…平等にみんなで一斉に逝きましょう。」

「鳴上君、その漢字は…嫌な感じなんだけど…」

寒い洒落にかまう余裕も無い、それに誤字ではないと思う…

俺達は全員一斉に料理に手を付ける…

生は真実、片時も夢ならず。  
もとより誰もが知る…

真実とは選り取るも…

はっ、今一瞬青い部屋が見えた！？しかも台詞は今見るのには早い  
気がする…何を言ってるんだ、俺はあまりのショックで錯乱したの  
か！？

周囲を見ると地返し如玉を取り出す宙さんと倒れている他の男3人…  
そして謝罪する風花さんとゆかりさんが居た…

恐ろしい敵と共に戦う連帯感で俺たち男達の連帯感が高まった気がする…

そしてその日から…順平さんが風花さんとゆかりさんの料理を食べ  
たいと口にするには無くなった。

ちなみに宙さんの料理は普通に食べられました。

6月14日（後書き）

ギャグ系の短編です。

ペルソナはたまには日常物も挟まなくてはと思いますね。

しかしペルソナシリーズの女の子はなんで料理苦手設定の子が多いんでしょうね…ペルソナ2の舞耶ねえも家事できない設定でしたし…3や4は言うまでもないですしね…

宙に関しては女主人公はお菓子を作れたし、料理は人並みに出来る設定です。

ちなみに今回イゴったのはただのネタです。言葉は動画サイトから探した4のを引用、今の鳴上がこれを見るはずは無いのですがギャグと思って流してください。

ではここまで読んでくださりありがとうございました。

ご意見、感想を頂けると嬉しいです。

6月15日

SIDE 有里 宙

昨日の事件で犠牲者が出たせいなのかは分からないけど風花が作った料理部に私も所属することになった。

本当は私が考えていることのために風花の力が必須だから訪ねただけ…

とりあえず結果的には風花の協力の約束は取り付けた。それに今後のためには風花に料理くらい覚えてもらったほうがよさそうだし、これ以上犠牲者が出るのも困るしね…（試食は慎重に…私が次の犠牲者にはなりたくないし…）

総合的には結果はバツチリ、次は美鶴先輩にも話しないと

「なるほど、君は随分鳴上を高く買っているな。」

「試用期間も兼ねてつてところですね。だからしばらくは美鶴先輩と真田先輩にもサポートしてもらって」

「分かった、引き受けよう。」

手回し完了つと、デメリットはあるがそれ以上に得るものもあるはずだ。さてそれじゃあ早速今夜タルタロスに行かないとね。

本日のタルタロス探索は妙な事になっていた。

桐条さんがナビ役を交代することになって戦闘班の人数は6人、そしてサポート能力の高い風花さんの加入、それに対して

「本日より探索班は二つに分かれて行動します。」

というリーダーの一言により俺達は二つに分かれることになった。

チーム編成は2年生チーム、つまり宙さんをリーダーとしたゆかりさん、順平さんのチーム、そして俺のほうは真田さんと桐条さんのチームだ。

最初は順平さんがもう一組のチームリーダーになろうとしたが…2年生チームのリーダーは勿論宙さん、そしてリーダー役になるのならこちらの誰かと交代と言うことになる。しかし…順平さんも真田さんや桐条さん相手にリーダーやるとは言出しづらいようだ。俺と交代するとは言い出さなかった。

そして俺は真田さん、桐条さんとともに探索を行うことになった。

「鳴上、君が私たちを指揮してくれないか？」

…聞き間違えかと思ったがどうやら現実のようだ…

「有里から提案はあったがな、それに加えて実際君の戦い方を見て思った。君もリーダーとしての資質はあると思う。」

「えっと、どういうことです？」

寝耳に水というやつだ。経験もあり年上の二人を差し置いて俺がこちらのチームの戦闘指揮？

「君は常に敵味方全体を見て戦闘を行っている。それに加えて君自

身も複数のペルソナを状況に応じて使いこなすことが出来る。」

確かに、俺のペルソナも新たに生まれることもあり、他の人には把握しきれない。指揮されるより自分の判断で戦ったほうがやりやすい。

「俺もそう思うな、悠になら任せられるしそのほうが俺も戦闘に集中しやすい。」

ちなみに昨日の事件で連帯感が高まったのか真田さんは俺を悠と呼ぶようになった。

「でもなんでこのメンバーで俺なんですか？」

他の人が入る前から戦っていた経験豊富な二人だ、俺が指揮して良いのか疑問に思える。

「このメンバーならではだ。私達なら君がミスした場合のフォローにも回れる。それに何より伊織が君がリーダーとなったら納得はしないだろうからな。伊織や岳羽にはまだ伝えていない。」

確かにな…順平さんはリーダーと言う立場に成りたがっているし…「つまり今後のために俺と美鶴がお前を鍛えるという意図もこめてこの編成だ。有里もよく考えている。」

「わかりました。未熟なりに俺も戦闘指揮をずっと宙さんだけに任せるわけにいきませんし、訓練だと思ってやってみます。」

「がんばってね、鳴上君、私もここからサポートするから」

どうやら風花さんにも手回し済みらしい、そりゃサポートや国は秘密には出来ないだろうけど。

『我は汝　汝は我』

汝の新たな絆により我ら汝の心の海より呼び出された』

『我は妖精達を統べる王、オベロン。』

『私は妖精の女王、ティターニア』

新しいペルソナ…真田さんと桐条さんとの間から生まれたのか…  
「よろしく願います、明彦さん、美鶴さん」  
俺は真田さんに習い彼らを名前で呼ぶことにした。

## SIDE 有里 宙

合流した3人を見て私は作戦が上手く行った事を悟った。  
6人でそろそろ戦うのもきついし、部隊を二つに分けることを考えた。

そしてリーダーを任せられるのは順平には悪いが鳴上君と思っていた。

理由として表向きの理由としてあげた彼のワイルドの力、常に戦況を見て行動する戦闘センスなどもある。

だが何よりの理由として前にイゴールが言ったこと。『彼は本来ならまだ力を目覚める運命ではなかったでしょう。いずれこのお客人になりえるかもしれない。今はまだそのときではありません。』という言葉…もしかして彼はこの件とは別の事件…別の戦いに身を投じるかもしれない。そのときに私が居るのかはわからない。それに備えて彼に経験を積ませておこうと言う意図もある。

と言っても問題は山積みだね…順平が知ったら確実に嫉妬するよ…ゆかりの場合は彼や風花が戦闘に参加することに未だに不信感持ってるし…





6月15日（後書き）

パーティー分割を今後するかもという意図のもと組み上げた話です。さすがにコンセントレイト、テンタラフーやあと一撃で倒せるのにタルンダ使う人に指示されたくは無いです（笑）

さてテイターニアに関してですが3では恋愛のアルカナ、4では女帝のアルカナなんです。今回は女帝のアルカナ扱い、美鶴との絆により生み出されました。

コミュに関しては女主にとって真田は星なんです。がペルソナのアルカナは皇帝、だから真田との絆によって皇帝アルカナのオベロンが生まれました。

まあ、最大の理由は真田と美鶴という二人の人物との絆により組み合わせとなるペルソナを出したかったんですよね。ミックスレイド、真夏の夜の夢は使えなくなりましたが。

ではここまで読んでくださってありがとうございます。

ご意見、感想をいただけると嬉しいです。

## 番外編 愚者？

SIDE 有里 宙

私は今日は鳴上君の釣りに付き合いながら色々と話をして過ごすことにしていた。

空いてる時間ってあんまり無いんだよねえ。

「それで、この前のタルタロス是件ですが、なんで俺をリーダーにしようと思ったんですか？順平さんなら喜んでやったでしょう？」

「美鶴先輩に聞いてない？」

「聞いたけどまだ納得いきませんよ。戦い方のセンス以前にまだパーティーを分ける必要性が感じられません、もう2、3人いたら別でしょうが…」

まあ、確かにデメリットとしての一つのパーティー3人体制は危険も多い。

でも5人や6人で戦うのはちょっと多いと思うんだよね、4人がベストだと思う。

「まあ、若い子に経験を積みませようと思ってるだけだよ。」

「そこまで年齢離れていないでしょう…」

ちっ、誤魔化されてくれない…

「わかったわよ、まだみんなには内緒だけだね。」

まあ、彼の今後の経験のためって言うのはベルベツトルームという私にしか見えない場所での情報をもとにした推測でしかない。だからもう一個の問題を彼にも解決を手伝ってもらおう。

「まあ、人間関係の問題もあるでしょ。」

つまりゆかりと美鶴先輩の間の壁、順平の自己顕示欲、それに2年、

3年間にまだ壁があると思う。

「でも一緒に活動しないと馴染むものも馴染まないと思いますが…」  
「確かにそうなんだけど…でもゆかりがまだ何か抱えてそうなんだよね。その辺上手く聞き出せないものかなあって思ってるのよ。」  
彼女の家庭事情なども少しづつ聞いているけど…戦う理由としてまだ何か抱えてるような気がするのよね、あの子…

「順平に関してはあいつが自分で解決しないといけないと思う。私がリーダーであることも不満そうだしね…。私たちの場合シャドウのほかにも内部の人間関係にも気をつけないといけないのよ。」

「結局内部の人間関係を解決するための時間稼ぎ、タルタロス内部で揉めないようにとりあえず分けたってことですか？」

「まあ、そろそろ大人数で戦っても戦闘経験は得られないし。今後のことを色々考えたらそれが良いと思ったのよ。最善策ではないかもしれないけど…」

勘だけどこ数日のペルソナ使いの発見具合を考えるとまだ人数増えるかもしれないし

「さて、それじゃあここまで聞いたからには君にも協力してもらおうよ。」

「え…？協力って何を…？」

「そうだねえ…ゆかりを口説いて悩みを聞きだすとか…」

ゆかりは理想高そうだけど彼ならいけそうな予感もする。順平は駄目っぽいし真田先輩は天然だし…

「ちょ、ちょっと無理ですよ。それにそういう目的で女性を口説くとか…」

「あはは、それは冗談としてもゆかりと仲良くなってくれと君のペルソナも増えるだろうし、良いこと尽くめだよ。利害関係抜きでもあの子は良い子だと思うし。それとも年上は射程圏外かな？」

「そんなことは無いですが…」

「ま、君も仲良くなってくれと嬉しいよ、ここってけっこう人間関係複雑だからね、私と君とて緩衝材になって状況よくして行こう

よ。」

「分かりました…努力はします。」

彼はわりと誰とでも仲良くなれるタイプだし…状況改善になってくれるとありがたいな。

番外編 愚者？（後書き）

おまけ

「お前の守備範囲は小学生から老女までだろ。」  
2年後、相棒からの言葉

今回はなかなか執筆が乗らなかつたです…出来もイマイチです…  
次回の満月までに数回番外編を挟みたいんですけど…ちょっと更新  
滞りがちになるかもしれません。

では読んでいただきありがとうございました。

## 番外編 女教皇？

SIDE 鳴上 悠

前回の作戦日の後、何度かタルタロスにも潜り風花さんもこの寮に馴染んできたようだ。

俺は学生の悲しさ、そうそう外食ばかりをするわけにもいかず自分の分の食事は自分で作ることが多い生活を送っている。（他の住人が食事をねだる場合は材料費と引き換えに作ることにしているが）ただ俺が食事の準備をしていると風花さんが俺に視線を向けていることが多い。

しかし前の経験からその風花さんに声をかける勇氣は無い…彼女に協力を求めることは惨劇再びという感じしかないからな…

「ねえ、鳴上君。」

俺は声を掛けられたときタルタロスで死神が出たときのような戦慄を感じた。

「な、何か御用でしょうか？」

目の端に自分の部屋に逃げていく真田さんと順平さんの姿が見えた…俺を見捨てるとは…しばらくあの二人の食事は作らない…

「私にも料理手伝わせてくれないかな？」

ここでYesと言えるほど俺の勇氣は高くない、しかしNoと言うにも勇氣いるよ、これ、俺はどうすれば…

「私最近料理部を作って宙ちゃんにも教わっているんだ。」

俺が聞いた話ではまだ成功例は無いはずだ…

「年上の方に手伝ってもらうわけに行きませんし…俺一人で大丈夫です。」

むしろ助けてください…

「あ、それじゃあ私に料理教えてくれないかな？」

…これはどう取るべきだろう…今後を考えると彼女の料理が上達することは良いことだ。

ただし味見という名の死亡フラグの可能性もある。しかし…

「まだ俺には人に教えるほどの腕はありませんよ？本を見て少しずつ自己流で覚えていただけですし。」

そう、俺は必要に迫られて多少料理に慣れているという程度、人様に教えられるほどの腕はない。

「そっか…じゃあ私がんばって料理覚えるから味見してくれない？」

「わかりました、料理を教えましょう。」

俺は即答していた。死亡確率は下げたいし…

そう考えながらも俺には死亡フラグ回避の良いアイディアも浮かんだ。

「俺は今日は自分の分は用意はしますので…外食の多い順平さんと真田さんに味見をお願いしましょう。」

見捨てて逃げた復讐も兼ねて…そして俺自身は回避しつつ、彼女の料理の危険度を自分の目で確かめよう。

その日：巖戸台分寮に犠牲者が二人でて、今日のタルタロス行きは中止となった。

今後俺は自分の食事は常に確保できるようにして少しずつ彼女の料理の上達に協力できると良いな…俺自身の命のためにも…

## 番外編 女教皇？（後書き）

すみません、ちょっとスランプ気味、この短い期間に風花の料理ネタを再び使ってしまった。

番外編を少し続けると言っていましたが調子を取り戻すためにも本編を進めて時間流れさせようと思います。

楽しみにしていただいてる方には大変申し訳なく思いますがもう少しお待ちください。

ではここまで読んでいただきありがとうございます。



6月20日

SIDE 鳴上 悠

今日は理事長が来るので寮に早めに集まる用に言われている…どうやら先日の料理のトラウマから肉体も精神も復歸したらしい。

寮に帰ると2年の女性3人が寮の前で犬と戯れていた。

「コロちゃん、お手」

「ワン」

お、賢いな、俺も犬と過ごしたい…

「あ、おかえりー」

「ワン」

「コロマルと一緒じゃい」  
犬も俺に挨拶とばかりに寄ってくる、可愛い…

そつえば前に噂話を聞いたことがある…

神社の神主さんの飼い犬だったが神主さんがなくなつたあとも自分で散歩コースを歩いているらしい。

それ以外は神社のところを守っている忠犬だと

…そんな話を思いだしていると通りすがりのおばさんと女性陣が話を始めたので俺はその間犬を撫でて過ごす事にした…やはり動物は良いな…

「鳴上君、今日は理事長が来るらしいからそろそろ寮に入ろう？」

「もう少しだけ…コロマルと遊ばせてください！」

別れを惜しむ俺だったが無常にも寮に引きずられた。たった30分ほどもう少しを繰り返したただけなのに…

理事長が来た用件は満月に出るシャドウに関する事だった。

さすがは研究者と言うことか…

話をまとめるとシャドウは12の分類に分かれている。

タルタロスに出ているのもそうだな。

『魔術師』 『女教皇』 『皇帝』 『女帝』 『法王』 『恋愛』 『戦車』  
『正義』 『隠者』 『運命』 『剛毅』 『刑死者』

今まで倒した大型シャドウ（俺が関わってないのも含め）倒したシャドウが分類上は『魔術師』 『女教皇』 『皇帝』 『女帝』 に分類されているらしい。つまりNo1～4。

つまり大型シャドウは全部で12体居て残りが8体。

シャドウが何のために人間を襲うのかなどとまだ謎のことも多いが大型シャドウが残り8体というのは大きな前進だろう。

まだ多いようにも感じるが1/3を倒したと思えば割と気楽な気がする。もつとも俺が戦ったのは2体だけけど…

と言っても敵も強くなっている…俺達もタルタロスの探索進めて力付けないとなあ…

6月20日（後書き）

コロマル登場の回です。

番長は一日猫と過ごすほどの動物好き、その対象は猫は勿論、犬、狐、クマ、どれも受け入れる人です。

理事長との話はただの説明なので長々と書いても本編そのままになるので大幅にカット、結果として話自体が短くなってしまいました  
が…

ではここまで読んでくださってありがとうございました。

7月7日？ FULL MOON（前書き）

時間が飛びました、スタンド攻撃を受けたわけではないです…

## 7月7日？ FULL MOON

SIDE 鳴上 悠

最近は表向き平穏な日々が続いている。

しかし世間では復讐代行サイトと言うものが流行っているらしい。俺はネットをやらないので詳しく知らないのだが…ネットに詳しい風花さんに調査を頼もうと思ったらタイミングが悪かったようで、ゆかりさんが何か依頼していたみたいだったので控えるということもあったが…まあ、あれから数日経ったが復讐代行サイトとやらの被害者らしい事件も起こってないようなので問題ないだろう。

そして迎えたのは7月7日、満月だ。

俺達の仮説が正しいのなら今日は大型シャドウが出る日だ。

早めに寮に帰り影時間を待つことにした。

影時間：風花さんのペルソナ『ルキア』が周囲を探る。探索型のペルソナって便利だな…

結果としてシャドウの反応は見つかった。

白河通り…そう言えば最近あの辺りでカップルで影人間が見つかるという話を聞いている。独り者の俺でもリア充が影人間になろうと爆発しようと思ったことか…とは言えない立場なんだよな…

しかしこれで満月の夜って言う仮説は立証されたってことだよな。

「白河通りってどんなトコだったっけ？私あまり行かないから」

風花さんは知らないのか？

「あ、そっか、ホテルんとこだこか。だから、二人一組なわけね。」

まあ、俺も行ったことはないんだけど…幾月さんは行ったことがあるようなことを言っている、内装が凝ってるだけとは言ってるが…間違いなくそういうホテルだよな。

「私も行ったことないから見物するの楽しみだなー。」

「私は嫌な予感しかないわよ…」

宙さんは楽しそうに、ゆかりさんは嫌そうに発言する。

「ゆかりツチ、子供なんだから。」

あーあ…順平さんはまた無駄に挑発を…

「だって宙ツチは楽しそうじゃん。」

「そういうこと言う順平のほうが子供じゃない。そんなこと言うなら私は今回前線で戦うからね。」

「え？予約制なの？っていうかむしろ全員で戦えば良いんじゃない？」

「いや、いざと言うときのために戦闘能力の無い山岸の護衛は必要だ。」

え？もしかして俺そっち？出来れば俺も前線に出たいんだけど…

「メンバーの人は有里に任せよう。」

「了解、現場行って考えますよ。」

好奇心的にもホテルの内装は見てみたいし…

「俺も前線で良いですか？俺はまだ大型シャドウとの経験少ないんで参加したいんですけど。」

それに対してしばらく考えるように見て…

「じゃ、鳴上君とゆかりは決定ね。あと一人くらいかなー。」

ということとで本日の作戦は始まった。別働隊に戦闘の可能性が少ないから今回はOKと向かう途中に言われた。

実際に戦闘確立が高い場合は俺を別働隊にするということらしい。とりあえず今回は俺も前線だ。張り切っていこう。

## 7月7日？ FULL MOON（後書き）

満月まで時間が飛びました。

この時期のイベントってストレガとか風花とゆかりとか真田と荒垣とかで主人公の知らないところで進む小イベントばかりなんですよ。

鳴上が介入するようなイベントにも思えませんし大きく飛ばしました。

日曜日には神社で天田君とは会えますが…別に必要ないだろうと思ってイベント起きてません。

だから思い切って時間飛ばしてしまいました。

満月編は数回に分けて行きます、出来るだけ早くアップしようと思っています。

ではここまで読んでいただきありがとうございました。

7月7日？ FULL MOON

SIDE 鳴上 悠

結局今回の戦闘チームは宙さん、ゆかりさん、美鶴さん、俺、女性の中に俺が紛れる形となった。

今回の二人一組の影人間という特性上なのか男が入るのを最小限にしたということだ。

順平さんも真田さんも不満そうだったがリーダーの決定には逆らえない。

ホテル・シャン・ド・フルールの内部は影時間っぽく赤いシミとかも見える不気味なもので雰囲気とかはありはしない。

しかし通路にある象徴化した棺おけも二つ並んでおいてあることからこのホテルの用途は分かると言うものだが。

とりあえず反応のあった客室、3階の大きな部屋に向かうことにした。

大きな部屋に居た大型シャドウは近くに十字架のようなものを置いた太ったタイプのシャドウ。今回の事件の内容から想像するようなほど変なのではないように見える。

『敵、法王タイプです。気をつけて』

法王か。名前的には今回の事件にあまりあわないうような気もするな…  
「風花、とりあえず分析、みんなは敵の分析済むまではあまり無理な攻撃しけないように。」

宙さんの指示に従い俺はまずは援護魔法を使うことにする。ペルソナはセイメイ、こういう時弱点がないペルソナを着けておくと安定する。



「ラクカジャ」

今回のフォーメーションでは俺とゆかりさんが後衛で援護。無理に剣で攻撃せずにペルソナで援護するポジションだ。

宙さんは頑丈なタイプのペルソナを下ろして前衛、美鶴さんもそれを補助する程度に前というポジションだ。

女性の後ろと言うのは格好がつかないが適材適所と言うものだ、俺が援護して負担を減らせれば良い。

「アレス！」

宙さんが今回メインに使うのは戦車のアルカナのペルソナ、アレスだ。順平さんが居ないこのパーティーでは物理能力は低め、俺も物理が得意なペルソナは持ってないしな。

『解析しました。電撃属性、光、闇属性は通じません。』

大型シャドウ…というよりタルタロス内も含めてボスクラスの大型のシャドウには光、闇はまず通じない。食らうと一撃で倒れる魔法が光、闇の魔法の特長だ、そう簡単には終わらないってことだろうな。

「明彦を連れてこなくて正解だな。」

確かに、真田さんのペルソナは電撃属性と低下系魔法、こいつが相手となると直接殴るか低下系かという選択になる。

「鳴上君、回復は私がやるから鳴上君は援護、それが終わったら攻撃に回って。」

「わかりました。」

俺は強化魔法で前衛を固めた後に攻撃に回る、満さんの魔法攻撃、宙さんの物理、このフォーメーションなら…わりと優位に戦闘を進めていたところでの油断がいけなかった。

『マハジオンガ！』

強力な電撃魔法を放たれる！俺は魔法耐性はわりとあるが電撃に弱いゆかりさんは吹き飛び体勢を崩す！？

『滅亡の予言』

な…敵への恐怖心が芽生える…動けない…やばい…このままでは…

「パワー！メパトラ！」

宙さんの魔法…身体が動く！

「セイメイ！メディア」

俺は回復魔法で態勢を立て直す。

「鳴上君、助かったよ、俺が回復魔法にまわり余裕が出たのでゆかりさんも態勢を立て直す。」

「よし、いけるな！」

俺達の状態を見て美鶴さんも回復にまわるか否かを判断し、結果として攻撃を続ける。

「ペンテレシア！」

美鶴さんのペンテルシア（舌噛みそうな名前多いよな…）が氷結を放ち、敵は凍結状態…チャンス！

そこに攻撃を加え体勢を崩す！

「よし、一斉に攻撃をするぞ！」

俺達はその隙を逃さないばかりに攻撃を加える！

『敵シャドウ、消滅しました』

よし…思ったより大したことなかったな

『お疲れ様でした。今回も無事に倒せてよかったです。こちらで待つてます。帰還してください。』

「今回は楽勝だったね。」

「ああ、戦闘バランスも悪くないしな」

「いつそのこともうこのメンバー固定で良いんじゃないですか？」

女性陣も軽口を叩きあっている。

「あれ？扉が開かないよ。」

外に出ようとした宙さんが言う。

『…！そんな…なぜ』

風花さんとの中継は繋がっているようだな。

『部屋にまだシャドウの反応があります。さっき倒したのは別のシャドウです。』

楽勝だと思ったら今夜も2体居たか…風花さんはサーチを開始し俺

達も部屋を調べることにした。

「あれ……？この鏡なんか変じゃない？」

というゆかりさんの言葉を最後に……俺の意識は遠くなっていった……

## 7月7日？ FULL MOON（後書き）

今回は法王戦までです。

7月7日はまだ続きます。

しかし戦闘描写をうまく書ける人は尊敬できますよね。

ではここまで読んでいただいております。ありがとうございました。  
次回更新は明後日を予定しています。

7月7日？ FULL MOON

SIDE 鳴上 悠

俺は見覚えの無い部屋に居た。おそらくはホテルの一室だろう。

しかしなんで俺がここに居るのか…何があっただのかが思い出せない…頭に靄がかかっているようだ。

思い出そうとしたが思考が定まらない…そうしているとバスルームからシャワーの音が聞こえてくる…

…シャワー使うような状況だったか？そもそも影時間だった気が…影時間ではシャワーって使えるのか…？

『享樂せよ…』

頭に声がよぎる…

『我、汝が心の声なり…今を享樂せよ』

思考がより鈍っていくような気がする…考えが定まらない…

『見えざるものは幻…形ある”今”だけが真実…』

…そんなものなのか…？

『未来など幻想、記憶など虚構…欲するまま、束縛から解き放たれよ…汝、それを望むものなり…』

よくわからない…このまま流されると何があるんだ…

『汝、真に求めるは快樂なり…』

それはちよつと違う気もするが…

シャワーの音が鳴り止んだ…

『な…君』

ん…？声が…？

『鳴上君、聞こえる？』

風花さんの通信…？そうだ、俺は法王の大型シャドウを倒したあと気が遠くなつて…

「はい、聞こえます、いったい何があつたんですか？」

『リーダーが敵の呪縛を打ち破つたので通信も回復しました。そこらは大丈夫ですか？』

風花さんと話しているとバスルームの扉が開く…そこにはバスタオルのみを羽織つたゆかりさんが…

「……………」

「……………」

『鳴上君？あとそちにゆかりちゃんもいるはずなんだけど？聞こえてる？』

「キヤー—————！」

次の瞬間俺の頬に激痛が走つた…

「ご、ごめんね、鳴上君、大丈夫？」

「あ、平気です…あの時点で正気を取り戻せたのは不幸中の幸いでしたね。」

あの状態だからセーフ、下手したら殺されてた可能性もあつたわけだし…

服を着たゆかりさんと一緒にリーダーたちと合流しようと思俺達は部屋を出た。

「ゆかりー、鳴上君ー、無事ー？」

俺達が居た部屋は2階だったらしい、階段から宙さんと美鶴さんが上つてきた。

「あ、宙、桐条先輩」

「無事みたいだね？何事もなかった？」

「何にも無かつたから！」

そんなに強調すると余計に怪しく見えると思います…というかそち

らは女性同士で何があつたんでしょか…と思うがそんなことを聞くほどの勇氣は俺には無い。

「宙さんが敵の精神攻撃を打ち払ったみたいでこちらも助かりました。」

「そっかー、もうちょいのんびりしてても良かったかなー、こっちはどうせ女同士だし。」

「有里、そんなことを気軽に言う状況ではないだろう。」

「そうよ、宙、ふざけたこと言っでないで。」

「ははは、まあ最後までいったら影人間になったかもしれないしね。」

「しやれにならないことを言っておられる…それから数分間口論が続いた…」

一段落付いたところで状況を整理することにした。

先ほどのシャドウは前居た部屋に居るらしいがどうやら結界を張っているらしくて近寄れないようだ。

口論の間に風花さんが分析したらしくこのホテル内の鏡に何か仕掛けがあるようだ。

「そういえばあの時、鏡が変だった気が…あれ、なんでそう思ったんだっけ？」

ゆかりさんが疑問を口にする…俺は良く見てなかったからなあ

「あそこの鏡には私たちの姿が映って無かったよ。」

「有里、よく気が付いたな。」

「こういうときの鏡は自分たちが映らないか、それとも存在しないものが映るかの二択ですよ。」

なるほど…確かに約束だ…

俺達は部屋を一つ一つ調べて姿が映らない鏡を探して叩き壊すことにした。

結界を構成してる鏡を割り先ほどと同じ部屋に来た。

今回はハートに羽と顔が生えたようなシャドウだ、法王のシャドウとペアではあるだろうがこっちが主犯だったんだろう。

『このシャドウが精神攻撃の元凶です！』

ああ、一部の仲間から殺意の波動すら感じる…

「風花、毎度のごとく分析よろしくー」

光と闇が聞かない以外は耐性は普通…って俺と同じじゃないか、これじゃ…まあよくあるタイプなんだよな…多分

「鳴上君攻撃力強化お願い！」

うわ…精神攻撃を恨んでるな、ゆかりさん…逆らうのも怖いので…

「セイメイ、タルカジャ」

俺は大人しく従うことに…

「ゆかり、慎重にね」

「わかつてるわよ、イオ！」

ある意味激昂状態かも…物理じゃなくてガルで攻撃はしてるけど…敵のマハラギオンは強烈だが俺が回復にもまわれればなんとかなるし…プリンパなどの精神攻撃を食らっても即座に癒せる状態だ…

厄介なのはマリンカリンによる魅了攻撃…これを食らうと味方に攻撃することになるがそれもしっかりと宙さんが準備してあったデイスチャームを使えば即座に治せる。

「イオ、ガルーラ！！」

怒りに燃えて攻撃するゆかりさんを他3人でフォローする形だが戦闘は優勢に進む。

こここの程度ならタルタロスにたまに居るボスクラスのシャドウのほうの手強い…

「とどめ！」

最後は自分の手とばかりにゆかりさんが放った弓矢でシャドウは落ちる…精神攻撃が得意ゆえか戦闘能力は大したことなかった。

もっとも宙さんがその精神攻撃を打ち破らなければ俺達は影人間になっただけだった…



「お疲れ様でした。」

俺達は待機組と合流した。

「トリッキーな敵だったけど、助かった。山岸と有里君らのおかげだ。」

たしかにな、打ち破ったあと風花さんのフォローがあったから俺も正気に戻れた。

「俺は暴れたり無いくらいだ。」

出撃できなかった真田さんは少し不満そうだが大型シャドウが倒れて一安心と言ったところだ。

話しながら真田さんと美鶴さんは撤収していく。

「そうだ、ゆかりちゃん」

ゆかりさんと風花さんも何かこっそりと話している。

順平さんは…

「宙、お前無理してるんじゃないよ。」

なんか不機嫌そうだな？

「別に無理してないけど？」

「あー、そう…まー、良いんだけどサ」

「ちよつと、どうしたの？まーた、女にリーダー取られてって不貞腐れてるの？」

「うつせえな！」

うゝん…今回出番無かったしな…相当不機嫌だ…

今は無理に話しかけないほうがよさそうだ…そっとしておこづ。

## 7月7日？ FULL MOON（後書き）

はい、7月7日編終わりです。

この視点ですとあの3人組が出るのはまだまだ先ですね。

あちらに視点を切り替えるのもありなんですけどそちらはイレギュラー要素ないからそのまま書き写すだけですし…なかなか扱いに困っています。

まあ、出番までそつとおこうと思ってます。

ホテルの相手はゆかりにしました。誰にしようか直前まで悩んでいたんですがあまり仲良くないので（ペルソナが発生していない）ので今回はゆかりにしました。

しかしこれパーティー選択しだいで同姓同士になるんですよ…今回もそうですが…順平＆真田とか嫌過ぎますね、個人的に…

ではここまで読んでくださってありがとうございます。

7月11日（前書き）

今回はほぼ原作から…カットしない理由はあとがきで

7月11日

SIDE 鳴上 悠

今日は幾月さんにこの前の事件のあらましを説明していた。

そしてそこで幾月さんから話があったようなのだが…

「待つて下さい。」

ゆかりさんから待ったコールが入る…最近寮の雰囲気が悪い…そこに絡む何かだろうか

「この際なんで…桐条先輩に訊きたい事があります。」

「私に…？」

「私だけじゃないと思いますけど、ここに来てから、ビックリの連続で…」

「私…少し流されてきた気がするし、だから、この際、はつきりさせたいんです。」

ゆかりさんは俺や風花さんが入る際もどちらかというと反対派だった。

彼女なりに考えるところがあるのだろうか。

「ズバリ訊きますけど…先輩、私たちに、まだ何か言っていないんじゃないですか？」

例えば影時間やタルタロス的事、分かんないみたいに言っていましたけど…あれって、10年前の事故と関係があるんじゃないですか？10年前の事故？聞いたことないな。

「10年前のジコ…？」

順平さんも知らないようで疑問を口にする。その後視線で俺に知ってるかと尋ねてきたので俺は首を横に振る。

「ゆ、ゆかりちゃん…」

風花さんは知っているようだ…最近二人で作戦室で相談しているようだったけど…そのことだったのか？

「学園の周りで爆発があつて、たくさん人が死んだ話…当時すごいニュースになった筈ですし、先輩は、知ってますよね？」

「…ああ。」

「幸い生徒は無事だったみたいだけど、でも、何かヘン。なぜかちやうど同じ頃一度に何十人も不登校になってるんです。」

爆発事故による危機感を感じた欠席ってことじゃないんだろうな…流れるに

「…これ、偶然なんでしょうか。」

「…どういう意味だ。」

「私、実は学園に残っている昔の書類とか、調べたんです。そして、不登校なんてのは記録だけ。ホントはみんな、急に倒れて入院したって…似てると思いませんか？…風花を苛めてた子が…入院したとき。」

「……。」

「ちゃんと説明してください！10年前の事故…あの日、本当は何があつたんですか？」

学園は桐条グループが建てたんだから、桐条先輩は知ってるはずでしょ！…」

な、なんか想像より重い話になってきたな…

「まあまあ、ゆかり落ち着いて、その剣幕じゃ先輩も話しにくいでしょ。」

宙さんが宥めようと声をかける。

「…隠してる訳じゃない。必要のないことは告げてないというだけだ。しかし…」

まあ、桐条グループに関わる問題だ、気軽に話せるものでもないとはわかる…

「…仕方ないさ、君のせいじゃない。」

この中で唯一の大人：幾月さんが口を挟む

「…分かった。全て話そう。」

シャドウには幾つ不思議な能力がある。研究によれば、それは時間や空間にも干渉するものらしい。私達は敵と思ってるからあまり意識しないが、もしそれを利用できるとしたら：どうだ？なにか大きな力になるかも知れないと思わないか？」

「あー空間というドラ もんのどこ もドアとかみたいなのを作るとか？」

少しでも場の雰囲気や和らげようと宙さんはそういう例を出す：あまり効果は無いようだ。

「君の言うのがどんな道具かは知らないが：14年前、そう考えて実践に移した人物が居たんだ。桐条グループの先代、桐条鴻悦：私の祖父だ。」

祖父はシャドウの力にいたく魅せられ：それを利用して、なにか途方も無い力を作ろうとしていたようだ。」

「途方も無いもの？…」

「実現のために、研究者を集いシャドウを大量に集めさせた。」

シャドウを集めた：？つまりシャドウはここ以外にも居るって事なのか？

「シャドウを集めたあ？うえっ…正気かよっ。」

思考も気になるが手段も気になるところだ。

「しかし、10年前：計画の最終段階で暴走事故が起き、実験は失敗：制御を失ったシャドウの力で、後には忌まわしい痕跡が残ることになってしまった。」

「それって、まさか…」

「そう、影時間と、タルタロスだ。」

なるほど…あれの原因が桐条財閥か：それは話せないわけだ：普通に考えて企業の都合とかもあるだろうし…むしろ話してくれたことが俺達が信用されていると言うことに感じる。

「記録では、集まられていたシャドウは分かれて飛び散り消失した

とある。満月の夜にやってくるのはこのときのシャドウだ。」

「消失…それでいつも、予想できない場所に…」

まあ…幾月さんはシャドウに関する知識があつたことだし…桐条で研究はしているとは思っていたが。

「ちよつと良いですか？今の話がホントならなんで学校がタルタロスに？」

まさか…実験をやった場所って…！？」

「…そうだ。」

「じゃあ…ウチの生徒が何十人も入院したっていう、あれも…」

「全て、君の考えている通りだ。傘下にあつて、人が集まり、最も好きなように出来る場所…恐らくポートランドは最適だったんだ。

実験の場所は、紛れもなく、10年前の月光館学園だ。」

「それ…どういうことですか…それじゃ、この部の活動って…無関係の私たちを使つて、そのときの後始末ってこと？」

たしかにそういう解釈も出来るよな…

「…騙したんですか？」

「……」

「真田先輩だつて知つてたんでしょ？これじゃ私たち都合よく利用されてるだけじゃない！？」

それとも先輩は、戦う理由なんて、どうでも良いって事なんですか？」

ゆかりさんはかなり熱くなっているみたいだな…

「そんな風に言つた覚えはない！理由なら…あるさ…」

「どう取つてくれても良い…黙っていたのは、確かに私の意思だ。

済まなかった」

話すべきか隠すべきか、難しいところだと思う、黙っていたことを怒るのもわからないでもないし…

「隠す気は無かつた…。だが筋道よりも、君らを確実に引き入れる事のほうが私には大切に思えた。理不尽だろうと、戦えるのはペルソナ使いだけ…世界で私達だけだからだ。」

「今さら…！」

「それに私には…力を得るかどうか、選ぶ余地など無かった。私は…」

「美鶴…もういい。」

美鶴さんの言葉を真田さんが遮る…付き合いの長い二人だし、色々事情は知っているんだろうな。

「岳羽君。…罪は過去の大人たちにある。そして彼らは、みんな自らの行いによつて命を落とした…今はもう、当事者は居ないんだ。謂れの無い後始末なのは、みんな同じなのさ。」

それはなあ…10年前…当時7、8歳の美鶴さんにはどうしようもないだろうし…そのときの幾月さんの立場は気になるが…

「でも…」

「事故から10年…シャドウ達がどうして今になって目覚めたかは、本当に分からない。でも目覚めたって事は、見つけて倒せるって事でもある。これ、どういうことか分かるかい？」

…どうということなんだ？

「あの12体こそ、全ての始まりなんだ。…と言ったら、分かるかな？」

「ヤツらを全部倒せば…影時間やタルタロスも消える…？」  
なるほど…！

「その通り！さっきは話の腰を折られちゃったけどどうだい、朗報だろ？」

「ゴールが見えたってことだものな」

「本当なんですか！？」

「確証となる記録もある。ここからが、本当の戦いの始まりだね。」

「ホントの、戦い…」

「事情がどうあれ、人を守るためなのは変わらない。シャドウ達はだんだん力を付けている。待っているだけじゃ勝てない。」

「…はい」

「それにタルタロス自体にも謎は多いからね。」



まったくだ、いったい何階まであるんだ…徒歩で登る高さには思えない…

「何故あんな巨大なものが現れたのか…僕らの知らない答えがきつとあるはずだ。」

シャドウに関しては色々分かってきているがタルタロスに関してはまだ謎ばかりだな…

「答え…」

その後美鶴さんとゆかりさんは部屋に戻った。一人で考えたいように宙さんが尋ねていても無駄だったようだ。俺は順平さんが全て理解できていないようなので風花さんと一緒に話の整理に付き合っていた。

「でもよ、全て終わったら俺達の力もなくなるんだろ？せつかく授かったのに…」

「そう…かもしれませんが気になっている点があります。」

「なんだ？」

「シャドウを集めたって話にありましたよね？つまりタルタロスや影時間は大量に集まったシャドウの影響だろうから消えるんでしょうけど…シャドウという種が元より居たというならシャドウ全てが消滅するわけじゃないってことだと思っんです。」

「あ…確かにそうだね。集めたって言うことはもともとからいたって言うことだし。」

「お？つまりペルソナは消えないってこと？」

「…まあでも普通に生活してシャドウと遭遇することなんてめったに無いことかもしれません。日常では使えないことには変わりませんし…」

「でももしかしたら世に残るシャドウを倒して回る正義の戦士…とかもありえるってことだろ。」

「可能性は0…ではないよね？」

「そうですね…そういうこともあるかもしれませんが。」

他のシャドウと遭遇する確立なんて0に等しい……けど0ではないだろう。

まあ、こういう不可思議な現象、普通は人生に一度のことだろうしな…

## 7月11日（後書き）

今回はほぼ原作とおりですがノーカットでお送りしました。

この話は4にも通じるところだと思っんですよね。

それにただの説明話だけじゃなく人間関係も錯綜するシーン。重要だと思いました。

順平が主人公に割と突っかかる時期でもあります。が年下の鳴上相手にあたるほど心の狭い子ではないと思うので普通に接しています。ではここまで読んでいただいてありがとうございます。

7月12日

SIDE 鳴上 悠

一夜明けて12日、日曜日。

テスト前と言うことも含めかもしれないけどなかなか寮内でみんなと会わない…

順平さんと真田さんは外出しているみたいだし…ゆかりさんと美鶴さんは下に顔を出さない。

俺としてはせっかくの上級生との寮生活…勉強教えてもらえればなあと思つてロビーにいたのだが…

この寮には学年トップの美鶴さんと宙さんが居ることだし…そうやって居ると風花さんは下りてきた。

「鳴上君だけ？」

普段はわりと暇持て余している人達が居るからな…

「ええ、勉強教えてもらおうとここに居たんですけどね。誰も来なくて。」

「なら私が教えてあげようか？」

「お願いします。」

風花さんも成績は上位らしいしありがたい。

「やっぱり昨日の話…みんな考えるところあるんでしょうか？」

休憩に入り俺がコーヒーを入れつつ話を振る。

「テスト前だからって思いたいけど…」

うーん…でもこう寮の雰囲気重いところから先に影響でそうだし

なあ…

「二人とも勉強？大変だねー」

話していると宙さんが降りてきた。

「時価ネット見てたら昼過ぎになっちゃったよー。」

いつもとペース変わらない様に見えるな…

「宙さんはどこに出かけるんですか？」

「んー日曜日はあまりすること無いんだよねー、なんなら私も一緒に勉強するかな」

「うん、一緒にやろうか。」

結局3人で勉強することにした。

「で、さっき二人が話してたことだけどさ。」

聞いてたのか…

「とりあえずみんな少し自分で整理する時間が必要じゃないかな…  
幸いタルタロス探索はそこまで問題でないよ。そっちのパーティー  
のフォローは鳴上君に期待してるよ。」

たしかにゆかりさんと美鶴さんの別行動はありがたい気もする、一  
緒だと気詰まりしそうだ…

「風花には両方見てもらわないといけないから大変だけどね。」

「う、うん、でも順平君は…」

「大丈夫だって、それにもうすぐ夏休みでしょ。パーッと気晴らし  
でもすればなんとかなるよ。」

「その前に期末テストだけどね…」

テストは気が重いが試験休みもあるし…そこらでみんなの息抜きで  
も出来れば状況はよくなるかな…しかし流石にリーダーだな、気に  
かけないようでみんなを見ているようだ。

その日はじっくり勉強を教えてもらった…成績上位と成績トップに  
教えてもらおうと学力はかなり伸びたような気がする。

7月12日（後書き）

期末テストイベント前のインターミッションのようなものです。  
ちよっと忙しいので短めで内容もあまり無いですが…  
ではここまで読んでくださってありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8553x/>

---

P 3 P + 番長

2011年11月20日22時53分発行